

反障害通信

23. 9. 18

137号

「科学的」という非科学

——自民党政治＝嘘つきの言うことを誰が信じるのか？——

汚染水の海洋放出で、関係者の承認がないかぎり放出しないという約束をしていたのに、福島漁連の会長が「最後の一滴まで反対し続ける」と言っているのに、海外から反対の声が上がっているのに、とうとう放出を始めました。「科学的」とか「最後までフォローする」とか「責任をもって」とか言っているのですが、そもそも肝心の約束を反故にしたうそつき政権を誰が信じるのでしょうか？

「科学的」ということを誰が信じるのか① 科学者たちの破綻した非科学

そもそもフクシマ事故が起きたすぐ後に、原子力の専門家と言われるひとたちがテレビに出て、「想定外」という言葉を連発していました。「想定外」発言は、安全神話をふりまっていた推進派のひとたちにとって、「科学者としての破綻」の露呈だったのです。「想定」するのが科学の役割だからです。想定できないことが起きるとしたら「そんなものは動かしてはならない」と反対の立場に回ることです。

関係裁判が続く中で、そもそも「想定」があったのに、握りつぶしていたということが明らかになっています。しかも、「科学的」といっているのに、事故処理のタイムテーブルは破綻し続けているのです。事故の起こした被害の甚大さえとらえ返せないで、何が「科学的」なのでしょう？ しかも、事故を起こした当事者国なのに、信じられないことに再稼働を続け、最初設定した稼働期間をどんどん延長して、何が「科学」が分かりません。「責任をもって」などと、言えるのは「無責任政治家」の極みです。

「科学的」ということを誰が信じるのか② データの改竄するひとたちは「科学」を語れない

「科学的」という言葉を正しく使うなら、あくまで正しいデータに基づいての議論です。虚偽答弁や、データの改竄をして、「科学」という言葉を使うのはなんとも恐ろしい恥知らずです。そもそも、政治の世界や社会的責任を問われる社会で、データ・文書の改竄などしたことは、とりわけ権力を持つひとたちがそのようなことをするのは、権力犯罪として重罪に処することです。また、虚偽答弁をした閣僚は閣僚の辞任のみならず議員辞職までして被選挙権も停止することです。官僚は懲戒免職にして公職追放することです。更に、刑事罰に関しては刑法の重罰化にはわたしは基本的に反対ですが、権力犯罪の事は別で、虚偽答弁に刑事罰も考えることです。政治の信頼を取り戻したいなら、そこまで踏み込むことです。尤も、今の政治はアベ政治以降、真逆に進んでいます。「科学的」とか「責任をもって」とかいう発言に接すると、条件反射的に「うそつき」という言葉が浮かんでくる有様です。

「科学的」ということを誰が信じるのか③ 「科学的」という言葉は無責任政治のために

使っている

「科学的」という言葉が、被害を語る時、政治の責任を語る時に、どのように使われてきたのでしょうか？ これまで使われてきた範囲内では、最も論理整合的な使い方は、「因果関係を立証する論文は出ていない」です。それを「因果関係はない」というと、非論理的文書になります。更に言うと、そもそも、20世紀において哲学・科学の世界でパラダイム(認識の基本的枠組み)転換が起きたとされます。ニュートン力学から量子力学へ、線形の函数から非線形の函数へ、ユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学へ、因果論的論理学から相作論的・函数的連関態・確率函数的連関態へと。因果論というのは $f(x) = ax + b$ という線形のしかも変数がひとつしかないような単純な方程式で、実際の世界は多変数の高次の変数、しかも、錯分子的・高分子的、合成函数態で表されることです。

最近起きていたことでいえば、ワクチンの副反応での死者を「因果論的に判定不能」という、20世紀までの論理学でしかない「因果論」で表記していることにそのことは表れています。それで「科学的」などと称しているのですから、もはや、笑えない笑い話です。アメリカでは、コンピューターを使った函数的連関を探し出す作業をしているという情報も出ているのに、日本の官僚は「将来の課題です」(これは霞ヶ関用語でやらないということ)と言ってやりそうにありません(これは保障・補償をしないための方便でもあります)。日本は「科学後進国」になってしまっていて、それで「科学的な」などという言葉を取知らずに使っているのです。もっとも、非科学的にごまかしに使えると思って使っているのかも知れないのですが。

もうひとつ、笑えない笑い話の例があります。事故後の小児甲状腺癌の発生が、事故まえから数十倍になっているという話があります。そもそも、これは統計学的な確率函数的なところで、事故前は100万人に1人か2人と出ていたのを(これが新しいパラダイムでの被害のとらえ方ですが)、政府の被害を少なくして保障・補償を少なくしたい意図をもった忖度学者が、「検査を増やしたから癌が見つかったのだ、放射線被害との因果関係はない」という論考を出していました。これは実は、新しいパラダイムの量子力学での「観測者の問題」的なとらえ返しともとらえられるようなことですが、現場の医者から「不必要な手術をしたというのか？」という反批判が出ています。そもそも、統計学的手法で出た数値に、変更が必要ならば新しい確率函数的方程式を出せばいいのです。

118回の虚偽答弁をした元首相を国葬にした政府の発する言葉は信じられない

そもそも、安倍元首相辞任後に「118回の虚偽答弁をした」と国会事務局が報告しているのに、それをマスコミがしらっと書くだけで、問題にならないということ自体が日本の政治の末期的状況です。おまけに、ウソを重ね、政治不信ということを起こした最悪の首相を「国葬」にした岸田首相のことをどうして信じられるのでしょうか？ どうも、「ウソをつき・つき通すのが政治家の才覚」という風潮が日本を支配しているようです。「嘘つきは政治家の始まり」、という政治状況になっているのでしょうか？

嘘つき政治に右に倣いする企業の不正行為も続発しています。企業の幹部が、謝罪会見しているのを見ていると、ばれたら謝罪会見をすればいい、ばれなきゃもうけものというところで、「我が亡き後に洪水は来たれ」というこの社会の精神を想起させます。そもそも、フクシマも、想定で事故が起きるといったデータがあったのに、金儲け主義でにぎり潰して

います。そもそも、電力会社の不正がつぎからつぎに出てきているのに、何十年も続く海洋放出の不正は必ず起きるとするのは臆断だと嘘つきたちは言うのでしょうか？

嘘つき政治——無責任政治の極としての汚染水海洋放出は認められない

いったいこの社会はどうなってしまったのだろうか？ という状況なのですが、「投票に行かないのが自分たちの政権を維持するのに都合がよい」という主旨の森元首相の発言を思い出し、「餅を食べたら忘れる」という安倍元首相下の官房長官の菅前首相の発言をも思い出し、ひとりひとりがしっかりと記憶と怒りを共有化して、自らがなすべき事をなしていくことなしには、われわれの生自体があやうくさせられている状況なのです。

この文もそのような思いの中で書きました。

(追記)「盗人猛々しい」日本政府の対応と、追従するマスコミ

海洋放出して、水産物の輸入停止をした中国の批判を始めました。何か勘違いしているようです。事故を起こしたのは中国政府ではありません、責任は日本の企業と原子力政策を進めた政府です。以前から、「従軍慰安婦」問題や「徴用工問題」で、「いつまで謝ればいいんだ」とか、その発言自体が謝罪をリセットする発言を繰り返し、靖国への政権与党の参拝というこれも謝罪をリセットする言動を繰り返してしていました。「いつまで謝ればいいんだ」というような居直り発言を「盗人と猛々しい」というのです。事故を起こした反省があったら、海洋放出する前に、ちゃんと謝罪と説明をすることですし、理解が得られるまで説得を続ける必要があります。そもそも反省がないところでは、また事故を起こすし、不正を繰り返して行きます。

そもそも、タンクに入っているのは、汚染水です。「処理水」でもありません。「アルプスを通したから処理水だ」というのですが、アルプスがきちんと機能していないか、全部取り切れないか、核種が残っているという話が科学的知見です。これからもう一度アルプスを通すとか言っていますが、それで済む話なら、もう一度アルプスを通し直したのをタンクに戻して、それで第三者機関で検査をし直してから考えることです。また残る核種は微量で、無視できるとしているのですが、それは前述した「線形の方程式」的数学の発想です。21世紀の科学ではありません。さまざまな高次の関数や合成関数や錯分子的構造で、化学的反応など、さまざまな影響がでることを想定していません。水俣の水銀汚染の食物連鎖による濃縮——生物濃縮という教訓を忘れています。「科学」は「万能の神」ではありません。むしろ「絶対的なこと」を否定することとしてあります。分からないことが多々ある、被害がでる恐れがあることは出来るだけ避ける、やらないということが科学の鉄則です。

農水大臣が「中国の対応は想定外だった」とか言っていますが、中国はそもそも対応処置を取ると言っていました。そもそもフクシマの後に「想定外」と言っていたのを忘れたようです。そんな忘れるひとや政府に科学を語る資格はありません。そもそも「想定外」という言葉を吐いた時点で「科学」的立場の否定です。

もうひとつ忘れてしているのは、安倍元首相がアンダー・コントロールと言って、オリンピックを誘致し、そのすぐ後に汚染水がもれでていたことが発覚して、世界的に「嘘つき首相」として有名になったことです。

そもそもトリチウムは危険ではない(註)と言っていますが、トリチウムがDNA変異をも

たらずとかいう話も出ています。そもそも、原発周辺で、癌の発生率が上がっているとか、白血病も発生率が上がっているという話もあります。そんな話も含めて、もう一度原発自体の「安全性」の議論からやり直すときではないかと思います。

もうひとつ、恐ろしいことが起きています。それは、以前からマスコミ幹部は政府とお食事会などをしていて、談合的なことの恐れが語られていて、一度何かの時に、主要新聞の見出しが統一されていたという指摘がされていました。今回、政府広報的な御用マスコミならいざ知らず、政府へのチェック機能を果たしていたテレビ・新聞までも、中国批判の論調で中国からの抗議の電話や「いたずら電話」のようなことを一様に報じていることがありました。ナチス幹部が戦犯になって、取調官に語ったことがあります。「政府の支持をあげる簡単な方法がある、他国が攻めてくると言えばよい」(精確には、「インターネットへの投稿」参照)。今回、岸田政権はまさに、自分たちの支持率がさがっているときに、まさに、外国への対立的批判という常套手段を用い、マスコミがそれに乗っているのです。米国が中国批判をして支持率を上げようとしていて、それでも裏で和解策をとっているのに、日本は、まさに加害国なのに、「盗人猛々しく」中国との対立の姿勢をとっているのです(これについては、次々回にまた巻頭言で書きます)。

中国と対立する意味がいったいあるのでしょうか？ 日本は食糧自給率も極めて低く、輸出でも中国依存が大きく大打撃を被ります。

(註) 安倍元首相さまざまなウソや詭弁を弄してきたのですが、そのひとつに、森友問題で追及されているとき、「(疑惑は)「ない」という証明は「悪魔の方程式」で、「ない」という証明はできない」というような話をしていました。「それだから「李下に冠を正さず」という格言があるのだ」と指摘されて、「今後そのようにします」でおしまいになったという、まさにそのような「アベ政治」が進んで行ったのですが。安倍元首相は、「私は最高責任者だ」という発言も繰り返していたのですが、その論理で言うと、「ない」という証明など出来ないことなのです。この論理を取り消すには、「うそつきを「国葬」にしたのは誤りであった」と閣議決定などで覆すことなのです。アメリカの属国的追従の姿勢で中国対立の構図を作り出し、アメリカは裏で和解をし、日本は梯をはずされていく、そこでアメリカの利益だけが推進される、日本の国際的な緊張関係は、増長されていく、こんな政治いつまで続けるのでしょうかー (み)

(「反差別原論」への断章) (66) としても)

読書メモ

今回は、マルクスの『資本論』草稿を読み込み、その作成過程での「抜粋ノート」まし押しえて読み込んでいった斎藤幸平さんの、マルクスをエコロジー的展開していこうとしている本です。前に2冊読んでいますが、この本はベルリン・フンボルト大学の提出した博士論文に手を加えて、新たな原稿も含んだ最初の本のようです。かなり長くなってしまいました。二回に分けようかと思ったのですが、あえて一回で出してしまう。わたし自らの論的深化に取り込もうとするときは、二度読み、三度読みしてから、文を書き始めるのですが、とりあえず、ざっと読んだだけで、読書メモを残して置きます。また再読し

て、もっと詳しい対話を試みるかもしれません。

たわしの読書メモ・・ブログ 634

・斎藤幸平『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』KADOKAWA（角川文庫ソフィア）2022

斎藤幸平さんの本三冊目。この本は2019年に堀之内出版から出された本の文庫版です。元々ドイツ語で書かれた博士論文に加筆した日本語版のようです。この本が前の2冊よりも先に出され、内容も幾らか重なっています。

わたしの問題意識にそって、対話を試みます。要点は三点。

まず最初（第一点）は、廣松渉さんの疎外論から物象化論へというマルクスの転回を批判しているところ。わたしは廣松さんを追いかけています。斎藤さんはアルチュセールと廣松さんをセットで批判していますが、廣松さんはほとんどアルチュセールについて論評を展開していません。廣松さんの物象化論はマルクスの物象化論をさらに堀下げて、言語論的異化や役割理論的なことも含み込んで展開しています。斎藤さんは『ドイツ・イデオロギー』以降も、マルクスは「疎外」という概念を捨ててないとして、転回を否定されているようなのですが、斎藤さん自身も押さえているように、ヘーゲル——フォイエルバッハ的「疎外」概念からの転回は認められているので、もしマルクスがその後も疎外概念を使っていることがあったとしても、ヘーゲル——フォイエルバッハ的「疎外」概念ではなく、感性的なところでの「疎外」ということであり、それは斎藤さんも使っている「分離」と置き換えても構わないところでの「疎外」という言葉なのだとはわたしは押さえています。これは具体的に「ド・イデ」以降、マルクスが疎外という言葉はどこでどのような意味で使っているかを、押さえていく作業で明らかになることだと思います。廣松さんは、ほとんど使っていないという指摘をしていますが、斎藤さんの方が、『MEGA』（文字通りの『マルクス・エンゲルス全集』）の編集に携わっていて、資料をもっておられて、検索をかければ出てくることですが、そのような具体的指摘がそもそも出されていません。

第二点は、エンゲルス批判、自然科学の体系的展開ということですが、わたしは、これは廣松さんも展開していることですが、むしろ弁証法を法則的展開として押さえて、ヘーゲルへの先祖返りをしたと批判されているという問題だと思っています。斎藤さんは、廣松さんの本をどこまで読んで批判しているのだろうと疑問に思っているところです。ヘーゲルは存在論と認識論と論理学の三位一体的展開としての弁証法を突き出しているのですが、廣松さんは、存在論を切り離しました。存在論を入れると絶対精神の自己展開というヘーゲル論理から抜け出せないからです。そもそも法則とは、廣松さんからすると共同主観的客観的妥当性の仮説で、その仮説で武谷技術論的な「客観的法則性の意識的適用」という、法則性を絶対化しないという武谷技術論批判を含み込んで押さえることだと思います。エンゲルスは弁証法——法則を物象化してしまっています。物象化というより、物神的な法則を見出そうとしているとも言えます。

第三点は、マルクスは哲学を捨てたという斎藤さんの主張です。そもそも、マルクスがまず経済学的なところにのめり込んで行ったのは、唯物史観的観点からで、この「唯物史観」ということ自体が哲学なのではないでしょうか？ 実は、斎藤さんは二冊目の本『ゼ

ロからの『資本論』で、「唯物史観からの転回」というところまで論を展開しています。そもそも経済学批判にのめり込んだ、そして自然科学や古代社会ノートとか、いろいろ学習し展開とようとしていること総体が唯物史観なしにありえるのでしょうか？それがまさにマルクスの哲学とも言いえることです。また、アナーキズム批判も、そもそもアナーキズムが色んな党派として展開されていたのですが、『ド・イデ』（これは草稿ですが）と『共産党宣言』の間に出された、プルドン批判の書『哲学の貧困』は、唯物史観の書とも言われています。また、第一点ともリンクしますが、そもそも廣松さんには、編著の『資本論を物象化論を視軸にして読む』岩波書店 1986 があり、「『資本論』は物象化論で貫かれている」という主張があります。そもそも『資本論』第1巻第1章最終節は「商品の物神的性格とその秘密」であり、そのどんでん返しはまさに哲学として読み解かないと意味がつかめません。

先に、論的深化のために否定的批判から入ってしまいましたが『MEGA』の読み込みの中における、マルクスとエンゲルスの押さえ、とりわけ環境問題での読み込みとして貴重な資料になっています。そのあたりの切り抜きメモを少し残しますが、その前に目次から押さえます。小見出しが節になっているようなので、本の目次にはない小見出しもアウトラインを押さえてもらうために（備忘録的に）書き加えます。

目次

はじめに

第一部 経済学批判とエコロジー

第一章 労働の疎外から自然の疎外へ

マルクス疎外論の再検討／「疎外」は哲学的なカテゴリーなのか？／

人間と自然の本源的統一の解体／一つの理論の連続性／哲学からの決別

第二章 物質代謝の系譜学

あらゆる富の素材としての自然／物質代謝の起源をめぐって／人間学的唯物論の限界／

『要綱』における生理学

第二部 『資本論』と物質代謝の亀裂

第三章 物質代謝論としての『資本論』

歴史貫通的な物質代謝としての労働過程／価値と物象化／

「素材」と「形態」の弁証法／資本主義的生産による物質代謝の変様・攪乱／

自然における資本の矛盾

第四章 近代農業批判と抜粋ノート

『資本論』とリービッチ／『ロンドン・ノート』と「収穫逡減の法則」批判／

四〇年代のリービッチとジョンストンの楽観主義／資本家リービッチの誇張／

『農学化学』第七版における「掠奪農業」批判／環境帝国主義とグローバル環境危機

第三部 晩期マルクスの物質代謝論へ

第五章 エコロジーノートと物質代謝論の新地平

『資本論』とリービッチ——再考／リービッチと「マルサスの亡霊」／

フラスの物質代謝論との出会い／フラスの沖積理論／気候変動と文明の危機／

素材的世界の限界としての気候変動

第六章 利潤、弾力性、自然

資本の有機的構成と剰余価値率／資本の「生きた矛盾」／資本の弾力性とその限界／
抜粋ノートと自然の弾力性／環境危機と経済危機

第七章 マルクスとエンゲルスの知的関係とエコロジー

マルクスとエンゲルスの知的分業？／物質代謝の射程／「支配」と「復讐」の弁証法／
エンゲルスと抜粋ノート

おわりに

あとがき

文庫版あとがき

解説

スラヴォイ・ジジェク

参考文献

切り抜きメモを備忘録的にキーワード的に抜き書きします。文献の表示、日本語のルビなどは割愛します。傍点は下線で。

はじめに

ここは、内容紹介・展開の中で、各章の説明もしているのですが、各章と重複するので、それを押さえる作業はしていません。

「その後数十年にわたって、マルクスの思想は「プロメテウス主義」——極端な生産力至上主義であり、技術的進歩によって、あらゆる自然的限界を突破して、世界全体を恣意的に操ることを目指す近代主義の思想であると批判され続けてきた。」7P・・・少なくとも『共産党宣言』の頃まではその傾向が強い。その『宣言』の引用

(マルクスの引用)「ブルジョアジーは、その一〇〇年たらずの階級支配のあいだに、過去の全世代を合わせたよりもいっそう大量的で、いっそう巨大な生産諸力を作りだした。自然力の征服、機械、工業や農業への化学の応用、汽船航海、鉄道、電信、数大陸全体の開墾、河川の運河化、地から湧いてでたような全住民群——これほどの生産諸力が社会的労働の胎内に眠っていようとは、これまでのどの世紀が予想したであろうか？」9P・・・西洋のベーコンを筆頭とする「自然の征服」という概念へのマルクスもとらわれ

「この「物質代謝の亀裂」という概念はもともと『資本論』からとられた概念であるが、いまや、マルクス主義者にとどまらない理論的参照軸になりつつある。例えば、著名なジャーナリストであるナオミ・クラインも『これがすべてを変える』においてフォスターの「物質代謝の亀裂」論を参照しながら、資本主義における気候変動の問題を分析し、さらには「エコ社会主義」を人権生存のためのオルタナティブと掲げるようになっている。」12P

「本書の目的は、物質代謝の亀裂論を以上のような近年の批判に対して改めて擁護することである。そのために、マルクスのテキストにいま一度立ち返り、より体系的で、より包括的な形でマルクスのエコロジカルな資本主義批判を再構成していく、なるほどバーケットやフォスターは様々なテキストを隈なく調べることで、マルクスの環境思想を浮かび上がらせることに成功している。一方で、彼らがテキストの時系列やマルクスとエンゲルスも区別せずに、両者のテキストを恣意的に切り取って寄せ集めいているにすぎないかのような印象を与えてしまっている。こうした誤解を避けるために、まずマルクスのエコロジ

一を経済学批判との明確な連続性をもつものとしてより「体系的」に展開していく、さらに、本書のアプローチはフォスターらの先行研究よりもいっそう「包括的」なものである。なぜなら、新『マルクス・エンゲルス全集 (Marx-Engels-Gesamtausgabe 以下、MEGA)』ではじめて刊行される新資料を検討することで、より正確にマルクスの環境思想の形成過程とその理論的射程を明らかにしていくからだ。そうすることで、マルクスが当時すでに盛んに行われていた持続可能性に関する議論に触発される形で、熱心に自然科学を研究するようになり、新たな知見を『資本論』に取り込んでいった過程が明らかとなる。その際の鍵となる概念が「物質代謝 (Stoffwechsel)」という生理学概念であり、この概念に着目することで、マルクスのエコロジーがもつ体系的性格を論証できるようになるのである。」13-4P

「その際に、本書が押し出すのは、フォスターやバーケットのような「マルクスの思想のうちエコロジカルな要素が存在する」という主張よりも強いテーゼである。それは「マルクスの経済学批判の真の狙いは、エコロジーという視点を入れることなしには、「正しく理解することができない」というテーゼだ。」16P

「都留重人が的確に述べているように、マルクスの経済学批判は、「経済現象を素材面と体制面との統一的矛盾としてとらえよとする」なのである。別の言い方をすれば、物象化の矛盾はエコロジーの領域において顕在化するのであり、マルクスはそこに資本の論理に対する抵抗の可能性を見出そうとしていた。」16P

「……ところが『ドイツ・イデオロギー (以下、『ド・イデ』)』において、マルクスは哲学的「理念」を疎外された現実に対置するという方法の不充分さを認識するようになり、さらには、その「攪乱」・「亀裂」を資本主義の矛盾として扱うようになっていく、その意味で、物質代謝概念は、本書の分析にとっての「導きの糸」である。」17P……マルクスが捨てたのは、ヘーゲル左派的な哲学であり、まさにそのひとつが「疎外」概念。哲学一般を捨てたとしたら空疎な思想になってしまいます。作者は「唯物史観からの転回」を主張しているけれども、そもそも、自然科学研究なども捨てることになるのでは？

(註[3]の文)「本書では、例外的ケースを除けば、Stoffwechsel を「物質代謝」と訳しており、Stoff は「素材」と訳している。ただし、どちらも Stoff という用語が入っていることからわかるように、両者には密接な連関があることに注意されたい。」17P

「その意味で、本書のアプローチは近年ドイツで流行しているミヒャネル・ハインリッヒに代表される「新しいマルクスの読み方 (neue Marx-Lektüre)」とは大きく異なっている。というのも、マルクスの実践的・批判的な唯物論的方法で問題になるのは、経済学的形態規定と具体的素材的世界の連関とその矛盾についての分析だからだ。」19P……「唯物論的方法」というとらえ方は哲学的とらえ方ではないのだろうか？

「なかでも重要な資料が、MEGA第四部門で刊行されるマルクスの抜粋ノート、メモ書き、自家用本への書き込みである。マルクスは勉強の際に抜粋ノートを作成する習慣を若いころから身に付けていたが、特に晩年の一〇年間に大量の抜粋ノートを作成した。具体的には、生涯に作成した全抜粋ノートの三分の一がその時期に作成されており、しかも、「たしかに、若きマルクスには、プロメテウス主義と批判されてもしかたがないような発言がしばしば見受けられる。だが、マルクスは生涯にわたって技術や生産力の発展を素朴に称

賛し、無限な生産力の解放というビジョンに依拠して未来社会を夢想していたわけではない。むしろ、自然の限界を認めていたからこそ、資本と自然のあいだの緊張関係のうちに資本主義の矛盾を見定めるようになっていったのである。マルクスの転換をはっきりと記録しているのが、一八六五・六六年に作成されたユストゥス・フォン・リービッヒの『農芸化学』からの抜粋である。」 24P

「利潤率をめぐる論争は、これまで数学的な側面から論じられることが多かったが、MEGAの新資料が示すように、マルクスは利潤率を資本の素材的担い手との関連で論じる必要性を説いていた。その際に鍵となる概念が「資本の弾力性」である。」 25P

「・・・・・・・・第七章でみるように、マルクスの一八六八年における理論的転換の結果、マルクスとエンゲルスの問題関心はすれ違いをもせるようになっていく、先行研究においては、エンゲルスが自然科学の専門家として扱われることがほとんどであり、マルクスの自然科学研究は言及されたとしても、マルクスとエンゲルスのあいだにはエコロジーをめぐる思想的な差異は存在しないと言われてきた (Foster)。だが、マルクスはヘーゲルやシェリングのような自然科学の伝統のもとで、宇宙における諸現象を説明するような世界観の構築や「哲学的普遍化」を目指していたわけではない。それに対して、エンゲルスは自然科学による宇宙の唯物論的説明を目指していたのであり、この違いがエコロジーという領域においても両者の見解に重大な相違を生み出すことになる。しかも、まさにこの差異のために、マルクスのエコロジーはエンゲルスやその後のマルクス主義者たちによって軽視され、場合によっては抑圧されることとなったのである。」・・・・体系的というところより、むしろ法則の物神化というところからとらえ返すこと。

(『資本論』からの引用)「・・・・・・・・大洪水よ、我が亡き後に来たれ！　これが、すべての資本家、すべての資本家種属のスローガンである。」 27P

第一部 経済学批判とエコロジー

第一章 労働の疎外から自然の疎外へ

この章では著者の廣松さん批判が展開されているので、廣松さんの著作を押さえようとしてきた立場で、もっとくわしく読み込んで行きたいのですが、『経哲草稿』の読み直し作業もしたいし、「廣松ノート」を進めたいので、後の課題にして、斎藤さんとわたしのざつとの対話にしておきます。章の前の各節(小見出し)に入る前の文が、その章の概略の説明になっています。ですので、本文と重複するので、特にとらえ返す必要がないかぎり、余りコメント切り抜きはしていません。ここでは、切り抜き・コメントは残しています。

「「実在社会主義」 30-1P・・・・？」

「・・・・・・・・つまり、「人間主義＝自然主義」という一八四四年の理念のうちには、マルクスが生涯にわたって放棄することのなかった根本的問題構成が潜んでいる。さらに、「人間主義＝自然主義」というモチーフに着目することで、先行研究における「疎外論」をめぐる哲学的論争のパラダイムを乗り越えて、『パリ・ノート』の意義を経済学批判の見地から理解することが可能になるだろう。そのことを示すのが本章の目的である。／とはいえ、当時のマルクスの理論的限界として、ルーピッピ・フォイエルバッハの哲学に大きな影響を受けていたという事実がある。そのため、『経哲草稿』にはあらゆる歴史的分析を抽象的で非歴史的な「本質」へ還元してしまう傾向があり、結果的に、マルクス独自の問題構成

は見えにくくなってしまっている。それゆえ『ド・イデ』において、フョイエルバッハの啓蒙主義から決別し、「唯物論的方法」を確立することが、エコロジカルな資本主義批判に向けたさらなる理論的発展のためには不可欠だったのである。」31-2P・・・そもそも「人間主義」という概念が、「人間主義——科学主義」という二項対立図式として批判されてきたこと。そもそも著者は、なぜ、「疎外」という概念のとらえ方が変わったとしているのに、なぜ、継続性を主張するのでしょうか？

マルクス疎外論の再検討

『経哲草稿』における「疎外」・「外化」という概念が若きマルクスの天才的洞察の記録していることを否定するマルクス研究者はおそらくいないだろう。ところが周知のとおり、このテキストの解釈をめぐる、国内外で無数の論争が繰り広げられてきた。ヒューマニストたちは、若きマルクスの「疎外された労働」という資本主義批判を高く評価し、人間的解放の構想を展開した（Fromm:Markovic）。一方でルイ・アルチュセールや廣松渉は、マルクスの理論的発展のうちには、「認識論的断絶」や「パラダイムチェンジ」が存在すると指摘し、とりわけ『ド・イデ』において、それ以前の間人学的シエーマを放棄して、新たな科学的立場に移行したと唱えている。」32P・・・『経哲草稿』における「疎外」・「外化」という概念はそもそもヘーゲル的概念です。著者もそれを押さえていて、そこからの転換を指摘しています。確かに、ヘーゲルの「疎外」概念を「労働」という場面に独自の展開をして見せた意義はあるとしても、そこからパラダイム転換して、ヘーゲルの頸城から脱したということも押さえることが必要です。また筆者は、アルチュセールと廣松の違いを押さえていません（わたしはアルチュセールを読めていないし、廣松さんはアルチュセールにたぶんほとんど言及していませんが（註））。廣松さんは訓詁の学を超えて、独自の物象化論を展開しました。物象化——実体主義批判としてのパラダイム転換という廣松さんがマルクスの思想を読み込んで、マルクスを超えて（「マルクスを超えるマルクス」・・・ネグリの本の表題）展開していった意義をとらえ返せていないのです。それは、マルクスの発展的継承なのです。マルクス評価とは別のこととして切り捨て、訓詁の学に陥らない限り、マルクスのなかにあった哲学的なことの発展形なのだとはわたしは押さえています。そのようなところでの、疎外論から物象化論へという廣松さんのパラダイム転換論なのです。

「疎外」は哲学的なカテゴリーなのか？

「つまり、疎外の発生は、「類的存在の意識的取得」に至る道程における「必然的中間段階」という形で説明されるのである。だが廣松がすでに批判しているように、こうした図式的で、歴史のテロス前提とした決定論が魅力的なアポリアの解決策でないのは明らかだろう。これでは、廣松やアルチュセールのように疎外論そのものを退けるという決断もやむをえないものになってしまう。／だが、次節で示すように、エルベやクヴァンテのみならず、廣松もマルクスの意図を捉え損なっている。なぜなら、アポリアはそもそも存在しないからである。・・・・・・」42P・・・後の機会に詳論しますが、確かに、齋藤さんは「疎外」概念をほぼ、「分離」として押さえているので、分離と書き換えれば、アポリアは存在しなくなります。ですが、マルクスがまだヘーゲル的なことにとらわれていたところでの、すなわちもろヘーゲル哲学的な「疎外」なのです。廣松さんにとって物象化批判は、その

核心は実体主義批判になっていくのです。そういう意味でのパラダイム転換です。

人間と自然の本源的統一の解体・・・「本源的」？「統一」？

「以上のように考えれば、疎外論のアポリアは存在しないことがわかる。」52P・・・そもそも哲学的な意味で疎外論を批判していて、そこから経済的な意味にも上向しているのに、何を言っているのか分からないのです。デリダの反本質論をくぐると、「本質」概念を使えなくなります。マルクスのヘーゲル「疎外」「外化」論批判をくぐると、疎外概念を使えなくなります。「哲学が死んだ」というなら、「疎外」ということばを「分離」に置き換えればいい話です。

一つの理論の連続性

「さらに、マルクスは人間と自然の統一という一八四四年の洞察を『資本論』にいたるまで堅持していたという事実である。」55P

「ここでマルクスは「疎外」という言葉を使ってはいないものの、一八四四年からの連続性は明らかだろう。・・・」60P・・・「使っていない」のです。ここで使っているのは、「疎遠」「支配」「対立」です。マルクスは転向しているわけではないから、「分離」という言葉も含めて、継続しているのは当たり前です。そもそも晩期マルクスの転回という方をしているのに、初期マルクスから経済学を軸に立てる転回も主張しているのに、なぜ、ヘーゲル哲学からの「断絶」は否定するのでしょうか？

哲学からの決別

「アルチュセールや廣松の「断絶」という見方が、マルクスの理論の重大な連続性を隠蔽してしまう問題含みの解釈であることは以上で示された。だが、他方で、一八四五年以降、マルクスはそれまで絶賛していたフォイエルバッハ哲学を批判するようになっていくという事実は残る。」54P・・・最初に書いているように「哲学が死んだ」としたから、哲学的転回としての疎外論から物象化論という転回がとらえられなくなっています。「断絶」はアルチュセールの言葉で、廣松さんは使っていないのでは？ そもそもエンゲルスの図式化した「哲学は死んだ・・・」という定式を、マルクスは受け容れていたのでしょうか？ マルクスとエンゲルスの乖離を押さえている著者はそれを受け容れるのでしょうか？

（『ヘーゲル法哲学批判序説』——「国家と市民社会の分離」から『ユダヤ人問題によせて』——二項対立図式の止揚的とらえ返し、）「市民社会そのものが近代の現実的矛盾であることを認識するようになる。このように当時のマルクスは哲学的理念の対置がもつ限界を認識し始めており、そこにはすでに、フォイエルバッハとの重大な差異が存在している。」67P・・・そこから唯物史観的なとらえ返しが起きてきているのでは？ そこに哲学的転回があるのでは？ 著者は唯物史観自体も否定しているけれど、「経済学批判序説」での展開は哲学ではない、というのでしょうか？ 物象化論には哲学的概念がないとでもいうのでしょうか？

第二章 物質代謝の系譜学

「つまり、前資本主義社会と比較して資本主義が極めて深刻な環境危機を引き起こすようになっていくには、単に生産力が飛躍的に増大したという理由だけでなく、むしろ人間と自然の物質代謝を媒介する労働が質的に変容していることが重要なのだ。／その限りで

「物質代謝」概念はマルクスの環境思想を明らかにするための「導きの糸」である。ところが、この概念は先行研究において正しく理解されてきたわけではない。それゆえ、まずは物質代謝概念を当時の自然科学の文脈へと置きなおし、マルクスの経済学批判にとって持つ意義を明らかにしていく、そうすることで、ヤーコブ・モンショットやルートヴィヒ・ビューヒナーに代表される自然科学的唯物論とマルクスの物質代謝論の親和性を強調するという誤りを避けるのみならず、ドイツの科学者であるユストゥス・フォン・リービッヒの影響を絶対視するような解釈とも違う、よりニュアンスに富んだ理論形成過程の再構成が可能になるだろう。さらには、そうした理解が、「形態」と「素材」の弁証法によって特徴づけられるマルクス独自の経済学的方法論を把握するための道を切り拓いてくれるのである。」 77P・・・この章の概略

あらゆる富の素材としての自然

「ここで参考になるのが、『要綱』の一節である。『ド・イデ』から一〇年たって、再び同様のテーマに戻ってきたときも、マルクスは生産者の自然からの「分離」という問題を資本主義的生産様式への移行についての決定的契機として描いている。だが、注目すべきことに、ここでマルクスは同じ現象を「疎外」というフォイエルバッハの用語ではなく、自然科学の用語を用いて説明している。マルクスは「自然との物質代謝」のための客体的条件の剥奪として定義しているのだ。」 79P・・・然り、それならば廣松批判はなんだったのか？

物質代謝の起源をめぐって

「物質代謝」という用語は生理学ですでに一九世紀初頭に用いられていたが、「最初の正式な概念の使用は、しばしばリービッヒに帰せられる。」 82P

「さて、これより以前のロンドン・ノート』には「物質代謝」概念は見当たらず、この語は『省察』で唐突に用いられているかのように見える。だが、マルクスがどこから着想を得たかは推測可能である。それが、ケルンの医師であるローラント・ダニエルスだ。」 88P

「ダニエルスは物質代謝を「同時的な破壊と創造であり、それによって身体みずからの個性性を絶えず新たに作り出すことによって、維持する——非有機的物体の類のうちには類似物を見出すことができない特性——」過程として定義している。こうした発言のうちにはリービッヒの物質代謝論との共通性はあるものの、他方でダニエルスは「有機的物質代謝」を「動物的物質代謝と精神的物質代謝」へ区別し、生氣論による「生命力」の想定を批判することでリービッヒとの違いを際立たせてもいる。」 90P

「ただし、ダニエルスの唯物論は、思惟、自由、人類史といったあらゆるものを、「精神的刺戟」に還元して、「刺戟生理学的に (reizphysiologisch)」把握してしまうことで、素朴な物質主義に陥ってしまう危険性がある(Mocek)。」 90P

「そして、リービッヒ『農芸化学』などの著作を同年 (一八五一年) 七月から研究し、『ロンドン・ノート』で抜粋したのだった。マルクスは物質代謝概念を用いて、生産・交換・消費からなる社会的連関を分析しようとしていたが、そこにはダニエルスの次のような要求との共鳴を見出すこともできるだろう。「人間有機体とその社会と自然への関係についての研究は共同的制度の改良、つまり社会改良のための唯一の確実な基礎をなす。」 92P

「ダニエルスの物質代謝論は、「多くの苦しんでいる人々」のための闘争にむけて、マルク

スによって引き継がれ、さらなる発展を遂げることになる。／この成果を十分に認識することができるのが、その数年後に執筆された『要綱』における議論である。すでに先に引用した箇所、マルクスは人間と自然の不断の相互作用を「自然との物質代謝」——つまり、自然における労働、原料、生産手段の素材的な相互作用——として描いている。マルクスによれば、この「生産過程そのもの」はあらゆる社会に共通の歴史貫通的な物質的条件である。つまり、どのような社会であれ、人間は自然を変容し、そこから受け取り、消費したものを廃棄する循環過程の中で生活を営まなくてはならない。労働もこの過程に不可欠の素材的な一契機であり、「活力をあたえる労働の自然力」と呼ばれている。」93P

「マルクスの素材論的転換と形態転換の対比的用法は、『要綱』よりも前に同じ用語を用いていたヴィルヘルム・ロッシャーと比較することで、その独自性が明らかになるだろう。」

95P

「さて、『要綱』にはさらにもう一つ別の物質代謝の用法がある。それが人間との関わりなく進行する「自然の物質代謝」である。……こうした物理的・化学的過程としての「自然的物質代謝」は、摩耗や酸化や腐敗によって生じる。」96P

「……つまり、マルクスによれば、労働は一方で、外界を意識的かつ合目的的に変容することができるものの、他方で人間からは独立した自然的条件や自然法則の作用を超克することはできない。それゆえ、労働によって与えられた人工的な姿態と自然の再生産法則の間には常に一定の緊張関係が存在しているといえる。こうした緊張関係があるからこそ、自然の荒廃を避けるために、自然的物質代謝の意識的な管理を試みるのがより重要になるのである。」99P

「以上の議論をまとめれば、『要綱』には三つの異なった物質代謝（労働——生産活動、「形態転換」、「自然の物質代謝」）の用法が存在しており（吉田）、それぞれにマルクスの独自の読み込みがうかがえる。その意味では、その元になったアイデアはダニエルスやロッシャーへと一義的に還元できるものではない。だが、そのことは、マルクスの概念を自らの解釈に合わせて恣意的に歪めてしまうことを正当化するものではけっしてない。そのような誤読の典型例が、モレショットに代表される自然科学的唯物論者に合わせて、マルクスの物質代謝概念を理解してしまうフランクフルト学派のアルフレート・シュミットの議論である。」99P

人間学的唯物論の限界

「自然科学的唯物論の問題は、マルクスの物質代謝概念がどこから影響を受けているのかという些細な文献学の問題にとどまらず、マルクス解釈全体に関わってくる、というのも、フォイエルバッハと自然科学的唯物論者たちには理論的類似性が存在し、その影響を強調してしまうと一八四五年以降のマルクスの非哲学的立場への移行が見えなくなってしまうからである。ところがマルクスの自然概念についての研究としてはおそらく最も有名なシュミットの『マルクスの自然概念』において、物質代謝のアイデアは「ある程度の確実さをもって」モレショットから来ていると述べられており、この見解はかなり広く受容されている(Böhme/Grebe;Fischer-Kowalski;Martinez-Alier)。モレショットの『生命の循環』で展開された物質代謝概念がマルクスのもものと相容れないということはすでに指摘されているが（椎名）、……」100P

「オランダ人医師で生理学者でもあったモレシヨットは、一八五〇年年代に、ルートヴィヒ・ビューヒナーやカール・フォークトとともに「唯物論論争」に参加し、精神の活動は「脳内物質の働きに過ぎず」、「思考の脳に対する関係は、胆汁の肝臓に対する関係や尿の腎臓に対する関係と同じである」と主張した。」 102P

「モレシヨットがフォイエルバッハの唯物論に関心を持ったのは、かつてマルクスがヘーゲル思弁哲学を乗り越えるためにフォイエルバッハに依拠したのと似たような理由であることがわかる。」 106P

「こうしたフォイエルバッハとモレシヨットの理論の共通性からも、一八四五年以降のマルクスが自然科学的唯物論を受け入れたり、評価したりすることはなかったことが推測される。というのも、モレシヨットもフォイエルバッハと同様に、あらゆる知覚や現象を「本質」である「物質」や「力」へと還元することで満足してしまい、新たな哲学的原理を据えることで、二元論を克服したと自称するからである。そのため自然科学的唯物論は人間と自然との関係性の具体的な歴史の変容には関心を示さず、不滅の本質である物質によってすべてを説明してしまう。だが、モレシヨットの唯物論は、現実を物質や力と同一視する素朴な実在論に陥る一方で、そうした物質や力の存在を説明できない限りで独断論に陥ってしまう (Gerhard)。それに対してマルクスは「現象」の「本質」への還元を一貫して批判していた。というのも、本質の認識についての啓蒙だけでは社会変革をもたらすことができないことを認識していたからである。こうしてフォイエルバッハとは異なって、革命の敗北後、マルクスはロンドンで資本主義の歴史的特殊性を明らかにするために経済学と自然科学の研究に取り組んだのだった。」 107-8P

「それに (シュミットの論考に) 対して、マルクスはこの「素材的側面」の歴史的・社会的変容を分析しようと、自然科学を熱心に研究した。事実、次章以降で見ると、マルクス自身のほうが、人間と自然の関係における「形態的側面」と「素材的側面」の絡み合いをより内容豊かに論じているのである。」 109P

『要綱』における生理学

「……だが、マルクスのアプローチはシュミットの「否定的存在論」とは大きく異なっており、経済学批判や自然科学との関連で「素材的側面」が具体的に展開されなくてはならないことが納得されるだろう。さらに言えば、マルクスの物質代謝論は『バリ・ノート』の抽象的な「人間と自然の弁証法」にとどまっていたわけではない。つまり、「素材」とは人間との関係なく存在し、自然の本質であるようなロマン主義的な理念ではない。／むしろ『ド・イデ』以降のマルクスは、そうした非歴史的な人間と自然との関係を存在論的に扱う立場を徹底的に退け、具体的な資料を読みながら、資本主義的形態規定との関連で物質代謝の包摂を分析しようとしていた。マルクスの経済学批判にとっての中心的な問いは、「労働過程が資本のもとでのその包摂によってどれだけ変化を被るか」という問題だったのだ。つまり、資本の物象化のもとで被る労働過程の変容と、そこから生じる人間と自然との物質代謝の亀裂を分析するのが、『資本論』なのである。そこで、第二部では物質代謝論を軸として『資本論』のエコロジカルな読解に取り組むことにしよう。」 120-1P

第二部 『資本論』と物質代謝の亀裂

第三章 物質代謝論としての『資本論』

「はじめに」でみたように、「マルクスのエコロジー」についての研究が深まりを見せているにもかかわらず、依然として批判や拒絶反応が強い。様々なテキストに分散的に見出されるにすぎないマルクスの発言からは、環境問題への真摯な関心は見出せず。それゆえ、フォスターらの「物質代謝の亀裂」論も行き詰まっているというのだ。」124P

「以下に示すように、マルクスの人間と以前との物質代謝の攪乱に対する批判は『資本論』の価値論から一貫して導出することが可能である。実際、『資本論』第一巻第一章の抽象的労働についての分析は、商品生産と持続可能性のあいだに存在する緊張関係をすでに示唆している。このことを把握するために重要なのが物象化論である。物象化論こそが、資本主義的生産様式がどのように人間と自然の物質的関わり合いを再編成し、最終的には破壊してしまうかを分析するための方法論的基礎を与えてくれるのである。／さらに「物象化」と「エコロジー」への着目は「形態規定」と「素材的世界」の弁証法的規定関係こそがマルクスの経済学批判の中心的テーマであることを明らかにするだろう。……」125P……

「物象化論」は哲学的概念ではないのでしょうか？

歴史貫通的な物質代謝としての労働過程

「とりわけここで注目すべきは、マルクスが、「労働」をこの物質代謝の媒介として定義している点である。……」126P……ここは、「労働」ではなくて「生産活動」で、しかも、「媒介」ではなく、直接的な物質代謝。

価値と物象化

「こうして、人間と自然の物質代謝は価値へと取り込まれ、一面的に編成されるようになっていくのだ。ここに、商品生産社会における人間と自然の関係のうち潜在的に存在する緊張関係を見出すことができるのであり、それは資本主義的生産様式の展開とともに、より大きな社会と自然の敵対性として顕現化していく。商品生産社会における価値による一義的な媒介のうちすでに商品生産の素材的軋轢の萌芽があるのであり、この点こそが、マルクスのエコロジーにとって決定的である。」140P

「とはいえ、現実における現象形態に近づくためには、『資本論』の記述をさらに追っていく必要がある。なかでも重要なのが「物象化 (Versachlichung)」の概念である。マルクスの物象化論をめぐるは様々の論争があるが、まずは「物 (Ding)」と「物象 (Sache)」の区別をしておこう (大谷)。私的生産者の労働が社会的性格を獲得することができるのは、価値を媒介とした商品交換によってであるが、その際、彼らは自らの「生産物」を「商品」とするように関わっている。この社会的な振る舞いによって、生産物 (上着や机) は純粋に社会的力 (価値) を付与される。この純粋に社会的な力を物が獲得することによって、「物」は「物象」へ転化するのである。これが物象化である。」140P……「生産活動」と「労働」の区別をつけること。

「マルクスは近代社会の転倒を「人格の物象化」と呼んでいる。客体的世界における転倒のために、私的生産者の社会的関係が直接的に人格的な関係としては現れず、物象的な関係として現れる。こうして「労働の社会的性格」は「労働生産物の価値性格」に、「労働の時間的継続」は「労働生産物の価値量」に、そして「生産者の社会的関係」は「労働生産物の交換関係に転倒して、物と物との関係として現れるのである (大谷)。」141P

「……こうして、人間の役割が物象の担い手に還元されていく (大谷;MEGA)。こ

れが「物象の人格化」である。」143P

「以上の考察からも素材的世界の変容がすでに「価値」のカテゴリーから始まっていることがわかるだろう。人々は物の運動によって支配されるのみならず（「人格の物象化」）、そうした支配を前にして、自らの欲求や態度を物象の担い手としての機能に自覚的に合致させるようになっていくのである（物象の人格化）。こうした転倒が、「資本」という価値の主体化によってさらにどのように強化されていくかについて、節を改めて考察していこう。」144-5P

「素材」と「形態」の弁証法

「都留はここでマルクスのアプローチが「素材」と「形態」の矛盾に着目していることをはっきりと定式化し、環境経済学のうちへマルクスの洞察を取り込んでいったのである。ところが、素材の役割はほとんどの先行研究において軽視されてきた。こうした傾向は、抽象的人間労働の「純粋な社会性」を支持する解釈——つまり、『資本論』の冒頭から素材的次元の考察を完全に追いやってしまう解釈——が支配的である限り、やむをえないことだったといえる。／典型的なのがアルフレート・ゾーン＝レーテルの「实在抽象(Realabstraktion)」の議論である。……」152-3P

「社会的構築物の支配が自然を破壊するという抽象的な言明を避けるためには、抽象的労働と物質代謝の素材的つながりを説明する必要があり、価値を歴史的普遍的な自然的・社会的物質代謝の「永遠の自然的条件」との関連で考察する必要がある。マルクスは素材的属性そのものが社会的規定性を受け取り、そのためにどのような現実的矛盾を生み出すかを分析しようとしていた。自然的属性は資本の形態規定に弾力性をもって対応するが、完全には包摂されないのであり、克服できない限界を有しているのである。」156P

資本主義的生産による物質代謝の変様・攪乱

「だが、物象化した物質代謝の問題は、資本というカテゴリーの登場とともにより顕著になる。というのも、資本のもとで、価値は社会的生産の単なる「媒介」にとどまらず、「目的そのもの」へ転化するからである。」157P

(註[13]として)「……マルクスの『資本論』はヘーゲルの観念論哲学を乗り越える形で資本主義の総体性を概念的に再構成しようとしているのではなく、現実の労働者たちへの共感によって貫かれている。」161P……ただし、このようにいうことによって物象化的なことを読み落とす危険性も

「……「大洪水よ、我が亡き後に来たれ！」これこそが「資本の人格化」である資本家にとってのスローガンであり、「資本は、社会によって強制されるのでなければ、労働者の健康と寿命にたいし、なんらの顧慮も払わないのである」(MEGA)。」163P……この本のタイトル、27Pにも。

自然における資本の矛盾

「マルクスのエコロジーに対する批判者たちはしばしば、こうした破壊性は人間の自然に対する支配が十分になっていないからであり、マルクスは社会主義におけるさらなる技術発展によってこうした問題さえも解決できると考えていたと批判してきた(Clark;Shantz)。だが、このようなプロメテウス主義はマルクスの真意を反映したものではない。マルクスの物象化論は、環境危機の原因を単なる技術問題とみなしているのではなく、人間と自然

の歴史貫通的な相互作用に対する経済的形態規定のうちに見出している。この点を考慮すれば、物質代謝の攪乱の問題は、資本主義のもとでの生産力の発展によっては解消されないことがわかるだろう。」173P

第四章 近代農業批判と抜粋ノート

「具体的には、一八五〇年代のマルクスには自然科学と技術学の適用による農業の収穫増大についてのかなり楽観的な見解が見受けられるが、一八六五年には楽観主義が姿を消し、むしろ近代的農業経営そのものが、「人間と自然の物質代謝の攪乱」を引き起こす「掠奪農業」として鋭く批判されるようになる。」177P

『資本論』とリービッヒ

『ロンドン・ノート』と「収穫逓減の法則」批判

「当時のマルクス（一八五〇年代のマルクス）は農業についての様々な本を通じて、農業生産性の増大のためには、土地の適切な管理が必要であり、自然科学と技術学の発展が歴史上はじめてその条件を準備していることに気がついていた。そのため、マルクスは収穫逓減の法則を批判するために、近代自然科学の進歩が土壌の肥沃度を飛躍的に増大させる可能性について調べていたのである。だが、その際に、ジョンストンやケアリは、現実の農業が土壌の養分を乱費し、急速に土地を疲弊させてしまっている事実を警鐘を鳴らしていたにもかかわらず、マルクスはそのことについてのまとまったノートを残さなかった。むしろ、マルクスはやや性急に、土地消耗の問題を農業実践の未熟さの問題に還元し、社会主義革命のためには、資本主義のもとで農業生産性を増大させることが重要だと考えていたのである。要するに、マルクスの問題意識はマルサスによって規定されていたのだ。「農業の改革、したがってまたそれにもとづく所有権の改革が、来るべき変革のアルファであり、オメガである。それがなければ、マルサスおやじの言い分も正しいものになる」(MEGA)。だが、ここからはマルクスのエコロジーはけっして出てこない。」191-2P

四〇年代のリービッヒとジョンストンの楽観主義

資本家リービッヒの誇張

『農学化学』第七版における「掠奪農業」批判

「また農業経営者は利益をあげるために、休耕もせずに底土を掘り返しては連作し、すべての収穫物のみならず、肥料として販売できるならば、本来自らの土地に戻されるべき干し草や骨粉も販売してしまう。こうして土壌養分の循環は乱され、持続可能性の条件は切り崩される。リービッヒはこうした短絡的な振る舞いを「掠奪農業」として批判したのである。」206P

「この年と農村の対立に注目すると、マルクスがなぜリービッヒを高く評価したかを理解することができる。『ド・イデ』以来マルクスがテーマにしてきた「都市と農村の対立」に、まさに新たな自然科学的表現が与えられているのである。」208P

「リービッヒは掠奪のシステムを近代特有の問題として捉え、その解決策に、人類全体の存続がかかっていると問題提起したのであった。その結果、掠奪農業を資本主義社会の矛盾として把握するようになったマルクスは、リカードやマルサスの収穫逓減の法則についてもこれまでとは異なったアプローチを採るようになる。というのも、マルクスは以前のように単に楽観的な農業発展の可能性を対置するのではなく、むしろ、自らの経済学批判

の方法にならって、リカードが非歴史的なものとして定式化した法則からその外見をはぎ取って、遞減的な収穫を生むことになる資本主義的生産の歴史的特殊性を掠奪として明らかにするようになっていくのだ。こうして、マルクスは、資本主義の破滅的な帰結として土地疲弊や自然資源の枯渇を研究するようになっていく。」 209P

環境帝国主義とグローバル環境危機

(註[9]として)「・・・・・・・・なぜならば物質代謝の亀裂(rift)は修繕されることがなく、せいぜい別の問題へと「移転 (shift)」されているに過ぎないからだ (Clark;York)。」 217P

「物質の循環に亀裂の入った資本主義における掠奪と乱費のシステムは、生産力と輸送手段の発展とともに、世界市場上の商品交換と植民地支配を通じた暴力による収奪によって、ますます大量の自然資源を資本蓄積のために利用しようとする。だが、そうした自然資源の利用は、土地の肥沃度自然資源をかつてない世界的規模で枯渇させ、より暴力的な争いを生み出す。最終的に、「環境帝国主義 (ecological imperialism)」はグローバルな物質代謝の亀裂を生み出し、グアノ戦争や硝石戦争が勃発することとなったのである。／リービッヒが正しく予測したように、「グアノ帝国主義」と呼ばれるグアノ資源の掠奪は、土地の肥沃度の維持にはつながらず、グアノも枯渇した。エコロジー的観点からすれば、それは物質代謝の亀裂を世界規模へと拡張し、近代の矛盾を一層深刻化させたにすぎない。」 219P

「マルクスは、都市人口の増大だけでなく、国際貿易の発達による物質代謝の亀裂の深化を資本の内在的傾向性として把握している。つまり、マルクスは有限な資源の浪費が常態となることを予測していたのだ。」 220P

「・・・・・・・・資本蓄積への際限のない欲求が、人間が自然との合理的で、持続可能な関わり合いを取り結ぶことを妨げる限りにおいて、資本主義の対抗策は利潤を増やしはしても、物質代謝の亀裂をけっして縫合することはできない。資本の論理に従って生み出された世界は、最終的には素材的世界の限界に衝突し、深刻な環境危機を引き起こすのである。」

221-2P

「・・・・・・・・アイルランド人のあいだに、聴覚障害、視覚障害、さらには精神疾患などをもたらしたのだった (Herres)。」 223P・・・「障害」の否定性に乗った環境問題と障害問題。

「・・・・・・・・この自然からの疎外が資本主義システムの正当性を長期的に揺るがさずにはいないことを、マルクスは資本による素材的世界の包摂の矛盾として把握し、より主体的で、自覚的な自然との物質代謝の管理を目指す「並外れた意識」(MEGA)が実践レベルで形成されることを構想していたのである。」 226P

「それゆえ、これまで何度も繰り返されてきた「生産力至上主義」や「プロメテウス主義」といった批判とは反対に、『資本論』でむしろ強調されているのは、独自の素材的制限を持つ外的自然に人間の存在が本質的に依存しているからこそ、社会はその制限に沿って意識的な生産を営まなければならないということである。社会と自然の自由な共生的な発展を可能にするというエコ社会主義の基本原則がこうして『資本論』にも根づいていることがわかる。それに対して、人間と自然の物質代謝を大きく攪乱し、人類の生存条件を脅かしているにもかかわらず有効な対策をさらなる技術の進歩以外には見出すことのできない資本主義こそが、プロメテウス主義に陥っているのである。」 226P

「・・・・・・・・しかし、マルクスはその知見を『資本論』へと十分に取り込むことができないままに力尽きてしまった。したがって『資本論』第一巻において展開されているエコロジー的観点が晩年の自然科学研究によっていかにして深められたかを知るための手がかりは抜粋ノートの中にいまま眠ったままである。その理論的意義をMEGA第四部のさらなる刊行を契機に明らかにし、マルクスの物質代謝論を展開することは、二一世紀のマルクス研究に課された理論的・実践的課題であるといえる。そこで、第三部ではこの課題に取り組んでいくことにしたい。」 227P

第三部 晩期マルクスの物質代謝論へ

第五章 エコロジーノートと物質代謝論の新地平

「前章では、『資本論』刊行以前の抜粋ノートを検討することで、マルクスが若い頃の生産力至上主義を捨て去り、資本主義による自然の掠奪によって生じる物質代謝の「亀裂」を資本主義の矛盾として把握するようになった過程を再構築した。」 230P・・・捨てたのは「生産力至上主義」

「だがそれだけにとどまらず、マルクスは『資本論』の第二部、第三部においても、「資本の回転」「利潤率」「地代」といった様々なテーマとの関連で、資本主義の矛盾が自然との関係においてどのような形で現れてくるかを分析しようとしていた。それゆえ、一八六八年以降により熱心に自然科学研究に取り組んだという事実は『資本論』からの逃避ではなく、経済学批判をエコロジーという領域においてよりいっそう深める狙いがあったといえる (Vollgraf)。」 230P

「・・・・・・・・それゆえ、これらのノートの内容をまったく検討せずに、マルクスのエコロジーがもつ意義を評価するのは早計である。事実、一八六八年のノートは、もし、『資本論』が完成したなら、マルクスは人間と自然の物質代謝論の攪乱という問題を資本主義の根本矛盾として扱っていたという推測を根拠づけてくれるように思われる。／裏を返せば、エコロジーがマルクスの経済学批判にとって中心的位置を占めることが見逃されてきた一因は、先行研究がこれらの抜粋ノートを無視し続けてきたことにあるのだ。ここでの鍵になるのが、ドイツ・ミュンヘンの農学者で、リービッヒの論敵であったカール・フラースからの抜粋ノートである。」 231P

『資本論』とリービッヒ——再考

リービッヒと「マルサスの亡霊」

「リービッヒの土地疲弊論が当時経済学者によって盛んに論じられていたのには、実際に土地疲弊論が当時の大きな社会問題になっていたからだけでなく、それがマルサスの過剰人口論を復興させたという理由が或る。デューリングの表現を借りれば、リービッヒはマルサスの食糧不足と過剰人口をめぐる古い言説に自然科学的な装いを与えることで、「マルサスの亡霊」(Dühring)を蘇らせたのである。マルクスがリービッヒの土地疲弊論についての反論をより丁寧に研究しなくてはならないと考えたきっかけの一つは、リービッヒの警告にマルサス主義的な主張が見え隠れすることに——『資本論』第一版刊行後に冷静になってから——気が付いたからなのである。」 240P

フラースの物質代謝論との出会い

「まず興味深いのは、マルクスがフラースの『農業の歴史』についての考察を「重要」だ

とみなしている点である。……だが、ここで注意すべきなのは、最後の一文（「自然学派は化学学派に対立している」）が示すように、フラス（「自然学派」）がリービッヒの鉱物説（「化学学派」）を批判していることについて、マルクスがはっきりと気が付いている点である。／ここで言われている「自然学派」と「化学学派」の対立とは、より正確には、フラスの「沖積理論」と、リービッヒの「鉱物肥料」のみならず、ローズおよびギルバートの「窒素肥料」も含めた「化学肥料理論」との間で行われた論争を指している。」 249-50P

フラスの沖積理論

「チャールズ・ライエルの定義を借りるなら、沖積とは「湖や海の下に沈んだままになっていない地上に、普通の河流、洪水、その他の原因によって流され、上流から運ばれてきた土、砂、礫、石、あるいは他の運ばれてきた物質」からなる（Lyell:Appendix）。堆積物質は上流から運ばれてきた岩石によるものであり、これらの物質には植物の生育にとって必要な無機質が豊富に含まれている。……こうした自然のうちに存在する事例にヒントをみつけたフラスは「人口沖積（künstliches Alluvion）」を構築することを提唱し、河川の流れを一時的な堰によって止め、耕作地を河川の水で浸し、必要な無機質を土壌に供給することを、安価で半永久的な土壌養分充足の方法として推奨したのである。『農業の本質』を読んだマルクスは、人口沖積についての記述に注意を払っており、それが「もっともラディカルな農業のための方法」（MEGA）であるというフラスの指摘をノートに書き留めている。」 260P

「フラスを読むことで、マルクスが新しい持続可能な農業の可能性を知るようになったことは明らかだろう。しかもそれは、リービッヒの「土地疲弊論」や「化学肥料論」を決定的な仕方に対峙するような形で、展開されたものであった。フラス自身が、窒素肥料論者と鉱物肥料論者による土地疲弊論争のパラダイムをはっきりと批判しているのであり、マルクスの関心が「鉱物肥料論者と窒素肥料論者」との論争から、「自然学派」と「化学学派」の対立に移っていったのも偶然ではない。……それに（「鉱物肥料論者と窒素肥料論者」）対して、フラスの沖積理論は人間と自然の物質代謝の管理についての第三の道を提示した。つまり、化学肥料に過度に依存しない自然の力を有効活用した、持続可能な農業経営を提起したのであり、そのビジョンこそが、リービッヒに取り憑いた「マルサスの亡霊」を追い払おうと格闘していたマルクスにとって、画期的な意義をもっていたのである。」 262-3P

気候変動と文明の危機

「マルクスは続けてフンボルトの指摘を書き留めている。」 270P

「以上の描写から、フラスとリービッヒの歴史観の違いは明らかであろう。不合理な自然との付き合いの結果生じる物質代謝の攪乱が文明の物質的基礎を掘り崩すという点で、両者の見解は一致している。しかし、その根源的原因は、フラスによれば、充足律を無視したことによる土壌内のミネラル物質の不足ではなく、過剰な森林伐採による地域全体の気候変動なのである。この点については現在でも見解が分かれており、どちらが正しいかを定めることはできない。重要なのは、マルクスの物質代謝の攪乱論が——リービッヒの土地疲弊論の絶対視では終わらずに——一八六八年以降、さらに拡大していったという

事実である。……」276-7P

素材的世界の限界としての気候変動

「マルクスは労働過程を、労働によって媒介された人間と自然の物質代謝として把握したが、労働を通じて、人間は自然を二重に変容させる。一方で、人間は目的をもって意識的に自然に関わり、様々な欲求を充足することができる。こうした意識的で目的論的なプロセスは人間に特徴的なものであるとマルクスは考えていた。だが、他方で、人間は意識的な生産活動を通じて、自然を意図しない形で大きく変容してしまう。それは、耕作と森林伐採が植物相や気候に与える影響を考えれば明らかだろう。フラスが詳述しているように、労働の結果、耕地は荒れ果て、最終的には文明自体が没落するような結果をもたらしてきたのである。つまり、人間が、単に自然を受動的な道具として扱う場合には、自然の物質代謝が攪乱され、長い歴史的な時間のもとで矛盾が蓄積されると、最終的には予期せぬ形で人間自身に襲いかかる。フラスは、この危険性をはっきりと警告している。」277P

「自然を道具化して扱う、全体としては無意識的にしか制御されていない社会的生産は、生産行為そのものが本質的に依存している自然が、実際には完全に恣意的な操作の対象ではないということを忘れ、最終的には、生産活動そのものを不可能にする不測の事態を引き起こしてしまう。こうして、文明は「荒廃を後に残」してきたのだ。」278P

「もちろん、『資本論』第二版「大工業」章の議論が示すように、マルクスはリービッヒの「掠奪農業」についての理論を依然として高く評価している。だが、それにもかかわらず、マルクスが一八六八年以降にフラスを研究し、「化学学派」と「自然学派」の対立を知るようになったことの重要性を過小評価してはならない。そこでは、リービッヒの土壌の化学分析からは見えてこなかった、気候変動という、より大きな矛盾が警告されているからである。その結果、物質代謝の攪乱の問題を、森林伐採、さらにはほかの環境問題との関連で、一層深く研究しなければならないとマルクスが感じるようになったとしてもなんら不思議ではない。」279P

「それ（フラスの一般化）に対して、マルクスは、フラスと異なり、人間と自然の持続可能な関係性を構築しようとする。それは将来社会において、アソシエイトした生産者たちが、人間と自然の物質代謝を意識的に制御することで実現されなくてはならない。しかし、「この意識的な支配にはもちろん彼（フラス）はブルジョアとして思い至らない」のだ。フラスの「ブルジョア」らしさとは、未来社会において解決が要求される資本主義社会の深刻な矛盾を直視しているにもかかわらず、近代社会のエコロジー危機を文明論的に、超歴史的な形で論じる傾向があるということに尽きる。それに対して、マルクス自身は意識的な社会主義的傾向を持って、フラスの古代社会研究のなかに、現代資本主義社会の矛盾が投影されていることを見て取り、その克服を社会主義の実践的課題として指定したのだ。」281P

「……マルクスの経済学批判の方法は、このような社会的生産から生じる素材的世界の攪乱を、資本の論理が引き起こした矛盾として、その歴史的特殊性を把握することにある。ここで重要なのは、単に経済的形態規定の社会性を明らかにするだけでなく、そうした形態規定を素材的世界との関連で把握することがマルクスの問題意識であったということである。そして、この絡み合いの分析のために、経済学の研究と並行して、素材的

世界の特質を自然科学によって解明しようとしていたのだ。」 283P

第六章 利潤、弾力性、自然

「論争は今日まで百年以上にわたって続いているが、その結果は必ずしも有意義だったとはいえないものが多い。その理由の一つには、エンゲルスの編集のせいもあって、マルクス本人の意図が正しく理解されないままに論争が進められてきたことが挙げられる。エンゲルスの甚大な努力なしにはマルクスの思想がこれほど広まることもなかったことを考えれば、その功績は疑いえないものであったとはいえ、「未完の体系」を「閉じた体系」にすることの限界ははっきりと認められなくてはならない (大谷)。」 288P

「そこで注目したいのが、「利潤率の傾向的低下法則」である。マルクスの経済学の歴史において、「転形問題」と並んで批判されることが最も多いのが、この法則である (Sweezy; Okishio)。」 289P

資本の有機的構成と剰余価値率

資本の「生きた矛盾」

資本の弾力性とその限界

「マルクスは資本主義が恐慌によって崩壊するだろうという予測を『共産党宣言』においては持っていたし、一八五七年の恐慌前にも依然としてそうした想定が見受けられる。だが、一八五七年の恐慌も資本主義が乗り越えるなかで、マルクスは資本の弾力的な力能に依拠した資本主義のシステムがもつ強靱さを認識し、その源泉を分析するようになっていくのである。」 301P

「とはいえ、資本にとっての問題は、みずからの弾力性が究極的には労働力と自然力の弾力性に依存しており、素材的限界に直面することである。つまり、一度これらの限界を超えてしまうなら、弾力性は伸び切ったバネのようにその機能を失ってしまう。」 304P

「……だが、それは単に資本の文明化作用と結びついた「全般的な有用性の体系」を世界規模で打ち立てるわけではなく、環境帝国主義という形で、人々を抑圧し、さらには人間と自然との物質代謝に「修復不可能な亀裂」を引き起こす。つまり、資本が絶えず限界を超えようとすることによって、むしろ環境危機を深刻化させ、持続可能な発展を不可能なものとするのである。ここでも、資本の限界は資本そのものであることが判明するのだ。」 308P

抜粋ノートと自然の弾力性

「前章でみたように、マルクスは一八六八年以降、農業における土壌疲弊だけでなく、様々な持続可能性の問題に関心を持つようになっていった。」 309P

「マルクスはこの「改良」についての一連の文章を抜粋した後に、極めて否定的なコメントをつけている。「早熟、全体的に弱々しく、骨の欠如、たくさんの脂肪と肉の発達(ママ)など。これらすべては人工的な産物である。反吐が出る！」(MEGA)。私的なノートで率直なコメントは、マルクスが無批判的に技術の発展を信奉していたというイメージを覆してくれるだろう。資本にとって有用性という観点からのみ、自然的過程に介入することに対して、マルクスはそれを掠奪という観点から批判しているのである。」 310P

「……マルクスにとって、人間と自然の物質代謝を持続可能な形で維持する可能性を掘り崩すような生産力の増大は「発展」ではなく、「掠奪」にほかならない。生産力至

上主義としてマルクスはしばしば批判されてきたが、「生産力」概念は、人間と自然の物質代謝の意識的な管理を実現するための主体的能力を含むものとして理解されなければならないのである。」 312P

「それゆえ、ハインリッヒが指摘するように、晩年のマルクスが利潤率の傾向的低下に言及することがなくなったとしたら、それはマルクスが資本の弾力性により大きな力能を見出したからであり、その力能を経験的次元でより一層詳しく研究する必要性を認識していたからだ。マルクスによれば、利潤率の変動は資本の素材的担い手と密接に関連しているのであり、両者を切り離して考察することはできない。資本の価値増殖と蓄積は単なる抽象的な価値の運動ではなく、生産過程において具現化されなくてはならないのであり、利潤率の計算において重要な価値構成の割合が「資本の有機的構成」と呼ばれるのは、まさにそうした素材的側面も包括した価値と技術の連関を表現するためなのである。」 316P・・・
利潤率低下の法則が必ずしも当てはまらないということでの、素材の環境的要因に留目したところでの、エコロジー的『資本論』のとらえ返しの真髄、とりわけ地代をめぐることから始まるマルクスの論考からの深化

環境危機と経済危機

「このことは、二一〇〇年までの気温上昇を二度以内に収めるためには、二〇五〇年までに二酸化炭素の排出量を実質ゼロにしないといけないという事実と、それを無視した場合の資本蓄積継続の確実性を考えれば、明らかである。このためフォスターとバーケットは「経済危機(economic crisis)」から区別して「環境危機(ecological crisis)」を資本主義の中心的危機として論じている。」 319-20P

第七章 マルクスとエンゲルスの知的関係とエコロジー

「とはいえ、フォスターやバーケットがマルクスは経済学批判の一環として環境問題を捉えようとしていたと唱え、その上でマルクス経済学とエコロジー経済学との対話を試みようとするほど、マルクスとエンゲルスの経済学批判をめぐる理論的違いから、エコロジーや自然科学研究の領域においても重大な見解の相違が存在するのではないかという疑念が強まってくる。／そこで、以下では先行研究と異なるアプローチを採用してみたい。つまり、これまで西欧マルクス主義によって無視されてきたマルクスの自然科学への取り組みを『資本論』との関連で検討することによって、エンゲルスとの差異を考察していく。具体的には、フォスターやバーケットがすでに指摘しているような自然科学研究における両者の共通性や協働を一定程度前提にしながらも、彼らが検討していないMEGAの新資料を『資本論』との関連で分析し、晩期マルクスのエコロジーの射程を明らかにしていきたい。そうすることで、『資本論』という未完のプロジェクトを二一世紀にエコロジカルに発展させるための理論的方向性が浮かび上がってくるだろう。」 323-4P

マルクスとエンゲルスの知的分業？

「こうしてエンゲルスは自然への弁証法の不当な拡張を理由に批判されることとなる。ソ連型マルクス主義の元凶はエンゲルスというわけだ。・・・・・・」 326P・・・レーニンがヘーゲルに先祖返りしたエンゲルスを評価し、エンゲルスが弁証法を図式化・物象化した法則としてとらえることから、スターリンの「自然弁証法の基礎に立つ弁証法」というソ連型の「マルクス主義」を生み出した。エンゲルスの自然弁証法なり弁証法の物象化した

法則的のとらえ返しは、単なる「不当な拡張」ではないのでは？

「だが、『反デューリング論』でエンゲルスはそうした（自然科学的研究の）マルクスの取り組みには何も触れずに、自らの研究がマルクスの「発見した」唯物論弁証法の応用であると宣言したのである。」 327P

「ところが、エンゲルスは（『資本論』第二版）「序文」においてマルクスの自然科学抜粋の存在に触れようとすらしなかった。なぜか？ この不自然な沈黙は抑圧の微候として解釈できるのではないだろうか。つまり、マルクスの自然科学研究が自らの自然科学研究とは違う性質のものであるということ、エンゲルス本人が認めていたというように。」 328P

物質代謝の射程

（註[2]として）「実は、弁証法の自然への適用を戒めたルカーチ自身が後に認めたように、マルクス本人は「社会」と「自然」の関係を完全に切り離したりはせず、人間もまた自然の一部としてとらえ、さらには「労働」を媒介とすることで、両者を統一的に把握しようとしていた。しかも、その際に、ルカーチはその鍵となる概念が「物質代謝」であることを先見的に認識していた。……」 329P

「ここ（エンゲルス編集の『資本論』第三部のマルクス草稿の変更 332P）から窺えるエンゲルスの自然科学研究の狙いとは、自然のうちに、人間から独立した形で弁証法的に実在する運動をそのままの形で「法則」として把握することである。」 333P

「ここでは、近代科学の発展がエンゲルスのプロジェクトにとっての土台を提供しているのであり、その限りで、エンゲルスもまた科学による自然法則の認識が人間の自由をもたらすというベーコン以降の基本的立場を共有している。したがって、エンゲルスの「自然の弁証法」において、自然法則の唯物論的把握が認識論的・存在論的領域にとどまらず、外的自然の「支配」による「自由」の実現という実践的要請に結びついているのは偶然ではない。エンゲルスにとって、自由な社会としての科学的社会主義の設立は、「自然の意識的な、本当の主人」になることを意味するのだ。333-4P・・・法則とは、共同主観的客観的妥当性としての仮説であり、その仮説を用いて様々な研究を進めることが科学としても、それを絶対化・物神化してしまうとヘーゲルやベーコンに逆戻りします。

「もちろん、エンゲルスは自然的法則を認識することで、完全に恣意的な自然の操作が可能になると考えていたわけではない。そのことを示すのが、自然法則を十分に尊重しなければ、自然は「復讐」するという有名な一節である。……」 334-5P

「だが他方で、資本主義的生産における「社会的な物質代謝」が「自然的な物質代謝」にいかなる変容をもたらし、人間と自然の物質代謝にどのような「修復不可能な亀裂」を引き起こすかを分析するというマルクスの物質代謝論に独自の問題構制が後面に退き、見えにくくなっている。……」 335P

「ところが、ここでの一見些細な変更に着目することで見えてくるのは、エンゲルスが、マルクスと異なり、リービッヒの「物質代謝」概念を評価していなかったという事実である。」 336P

「ここで重要なのは、蛋白体という「歴史性を持つ物質」の生成という視点がエンゲルスの「物質代謝」概念にその独自性を付与する一方で（吉田）、リービッヒの「物質代謝」概念は批判され、その結果、エンゲルスにおいては、環境問題にも適用されることがなかつ

たという事実である。だが、その代償は大きい。というのも、マルクスの物質代謝概念が持っていた、人間と自然の関わり合いを超歴史的・歴史的側面から分析し、資本主義における人間と自然の関係の歴史的特殊性ならびにその矛盾を明らかにするという機能までもが失われてしまうからである。むしろ、エンゲルスの「物質代謝」が扱う問題は自然の中で人間の関わり合いとは関係なしに生じる生命の起源・進化のプロセスに限定される。ここで、エンゲルスにとって、「否定の否定」という弁証法の原動力は、「動植物界でも、地質学でも、数学でも、歴史でも、哲学でも効力をもっている法則」(MEGA)であることを思い出そう。『自然の弁証法』の主要なテーマはエコロジーではなく、あくまでもこの法則が自然全体に貫徹していることの証明なのであり、「物質代謝」概念もそのための役割を担っているにすぎない。物質代謝論を欠くために、エンゲルスのエコロジーが持つ先見性が先行研究によってしばしば肯定的に言及されるとしても、「自然の復讐」以上の理論的な枠組みを見出すことはできないのである。」337-8P・・・エンゲルスの法則の物神化

「・・・・・・・・エンゲルスはマルクスがリービッヒの掠奪農業批判を通じて展開した「人間と大地の物質代謝の攪乱」という概念を採用しようとしなかった。だがその代償として、マルクスの理論的跳躍が「社会的な物質代謝」と「自然的な物質代謝」の「連関」の分析にこそ記録されているということにエンゲルスは十分に気がつくことができなかった。つまり、エンゲルスは人間と自然のあいだで行われる「物質代謝」が資本による労働の形式的・実質的包摂を媒介として、どのように変容、そして再編成されるかという一八五〇年代のマルクスの経済学批判の方法論の根幹部分を捉えきれなかったのだ。」338-9P

「マルクスは、いかなる社会においても人間は労働しなければならないという認識から出発し、そのうえで、資本主義的生産様式における歴史的に特殊な労働のあり方を分析することで、主客の転倒した社会における疎外がなぜ、どのようにして生じるかを明らかにしようとした。それゆえ、エコロジー危機を「資本主義の利得を追求した大量生産が悪い」と批判したり、「人間と自然の共存の必要性」を道徳的に訴えたりするだけでは不十分である。マルクスによれば、エコロジー問題は、根源的な生産条件である自然からの人間の「分離」(「自然からの疎外」)から説明されなくてはならず、物象化に基づく資本の論理の社会的諸関係への浸透がいかにもわれわれの思考・行動様式を変容し、人間と自然の物質代謝を攪乱してしまうかを経済学批判は解明しなければならないからである。」339-40P・・・「労働」というより「仕事」、「疎外」は「分離」、「乖離」に置き換えられること。

「一八四〇年代の立場にとどまったエンゲルスには、経済学批判とエコロジーを結びつける「人間と自然の物質代謝」という視点が欠けており、「自然の復讐」という静的で、文明論的な指摘にとどまったといえる。節をあらためて見るように、こうした把握の違いは両者の社会主義像にも反映されることになる。」340P・・・エンゲルスは、*哲学の死を宣言した*ところで、むしろヘーゲルへ先祖返りしていくことをとらえ返せなくなってしまった。「とどまった」のではなく、むしろヘーゲル批判の地平もとらえ返せなくなってしまっていました。

「支配」と「復讐」の弁証法

「そうした(プロメテウス主義)批判への応答として、例えばヘザー・ブラウンは、『資本論』のフランス語版に着目し、マルクスが該当文書を変更していることを指摘している。

そこでは「その諸力の働きを自分自身の制御に服させる」という部分が削除されているのである(MEGA)。」 341P

「とはいえ、マルクスにとって、資本主義的生産による物質代謝の攪乱は、単なる自然の「復讐」ではない。というのも、『資本論』はさらに二つの観点から問題を展開しているからだ。第一に、資本はそうした自然の制限を受け入れはしない。第二部草稿で述べられているように「資本が価値形成者および生産物形成者として作用する範囲は、弾力的であり、可変的」だからだ(MEGA)。……自然的制限を乗り越えようとする資本の試みは、矛盾を解消するどころか、素材論的世界に世界規模でさらに深刻な物質代謝の亀裂を引き起こす。この資本と自然の間で繰り広げられる動的な関係の分析こそが、晩年のマルクスの研究テーマであった。……人間が自然を変容し、自然もまた人間を変容させるという相互規定的な歴史過程を物質代謝的概念に基づいてマルクスが把握しようとしたのは、資本主義の驚くべき弾力性の秘密とその「生きた」矛盾だったのである。／第二に、物質代謝の攪乱についてのマルクスの論述は、自然の「復讐」という「終末論」的なトーンを弱め、むしろ、抵抗の契機として、より能動的な要因を強調している。」 341-2P

「先にみたようにエンゲルスは自然の諸法則を認識し、それを外界に対して意識的に適用する必要性を説き、法則の認識を通じた自然の支配を「自由の国」とみなしたのであった。だが、ここでのマルクスの力点は明らかに異なっている。……マルクスによって強調される将来社会における「個性」の全面的な発展という契機がエンゲルスにおいては弱められ、むしろ必然性に従うことで実現される自由」というヘーゲル的な自由観が前面に押し出されることになったのである。」 344-5P

エンゲルスと抜粋ノート

「……端的に言えば、マルクスの自然科学的研究の目的の一つは、資本の論理に従った人間と自然の物質代謝の変容から素材的世界における軋轢がいかにかに生じてくるかを研究することだったのである。」 346P

「……つまり、両者の自然科学をめぐる知的関係は一八六四年の頃と逆転して、エンゲルスがマルクスの後を追うようになっているのである。」 347P……同じようなことは、『ド・イデ』、経済学においても。

「ところが、マルクス自身のフラスコへの関心は、「自然の復讐」や「ダーウィン主義」にとどまらなかった。……同じ手紙の中で、マウラーの理論に「社会主義的傾向」を見出している(NEW)。そして、一八六八年以降、マルクスは自然科学研究と並んで、前資本主義社会や非西欧社会といった非資本主義社会を研究するようになっていったのである。」 348-9P

「……一八八一年二・三月のヴェラ・ザスーリチ宛の手紙でマルクスはマウラーに直接言及しながら、アルカイックな共同体の生命力に依拠した農業協同体の残るロシアが資本にたいする抵抗拠点となり、西欧とは異なった社会主義革命への道を切り拓く可能性を認めたのだった(MEGA)。」 351P

「マルクスは自然的制約を認めることがなかったという批判とは反対に、まさに自然的制約の把握こそが自然科学研究の狙いであったことが抜粋ノートを読みことによってわかるのである。」 354P

「晩年まで続いた自然科学への取り組みにもかかわらず、マルクスは新たな知見を『資本論』に取り入れることができないままに力尽きてしまった。それでも、以上の考察から、マルクスとエンゲルスの自然科学研究の相違を見て取ることができるはずだ。まず、エンゲルスの力点は、自然科学によって自然そのものに存在する諸法則を百科事典的に認識することであり、それによって「自由の国」を設立することにあつた。マルクスの「唯物論的方法」が実践的構えとして、特定の社会的諸関係のもとでの主客の転倒・現象と本質の取り違えの構造を明らかにするものであるとすれば、エンゲルスの「唯物論」は、「意識」と「物質」の二元論のもとで、物質の存在論的優位を説く哲学的で、(しばしば人間から独立した)超歴史的な枠組みによって規定されている。そうした独自の問題設定のために、エンゲルスはリービッヒの「物質代謝」概念を拒否することになり、一八四〇年代の「都市と農村の対立」という把握で満足し続けたのだった。／それに対して、『ド・イデ』以降のマルクスにとって、そのような哲学的関心に基づく超歴史的な法則の探究はもはや問題とはならなかった。むしろ、マルクスは「物質代謝」概念を発展させることで、人間と自然の物理的かつ社会的な関わり合いの変化を歴史的、経済的、自然科学的見地から把握しようとしたのである。とりわけ、近代の大工業のもとでの技術学の発展は、人間の合目的な自然の関わり合いを「[価値増殖という]特定の目的のための自然科学、力学、化学などの意識的適用」(MEGA)へと解体し、人間と自然の物質代謝にこれまでにない規模で介入していく、一八六〇年代以降自然科学や技術学を熱心に研究していたマルクスは、近代に特有な自然科学の技術的応用が「資本の生産力」として現れるために、自然との物質代謝の攪乱が生じてしまう危険性を察知し、資本主義が持続可能性を持たないシステムであることを警告したのだった。」355-6P・・・『哲学の死』を宣言したのはエンゲルスで、マルクスではないのでは？

「不幸なことに、こうした両者の問題意識の害のために、マルクスによる自然科学研究の重要性はエンゲルスやその後のマルクス主義者たちによっても認められず、抜粋ノートは現在にいたるまでその意義が無視され、放置されてきた。そして、同様の傾向は伝統的マルクス主義を批判する二一世紀の西欧マルクス主義によっても受け継がれてしまっている。だが、MEGAの刊行によって状況は徐々に変わりつつある。だからこそ、『資本論』第一巻の刊行から一五〇年経ったいま、マルクスの思想の意義をもう一度問おうとするなら、これまで軽視されてきた膨大な資料を丁寧に吟味することが不可欠なのである。」356P

おわりに

「もちろん、若きマルクスがプロメテウス主義的な思想を持っていたことも認めなくてはならないとはいえ、『資本論』においては、自然科学と技術の発達によって、自然を完全に「第二の自然」に変容し、自由に支配することができるという考えはまったく見当たらない。他方で、若きマルクスもまた人間と大地との「疎外」・「分離」に着目して、近代社会の矛盾を説明してきた事実がもつ理論的意義は過小評価されてはならないだろう。というのも、こうした見方は、近年流行の社会と自然の「一元的総合」とははっきりとした対照を成しているからだ。・・・・・・そのうえでマルクスが一貫して取り組んでいるのは、近代における自然からの疎外に基づいた資本主義において、純粋に社会的な経済的形態規定がどのようにして人間と自然の物質代謝を変容して、攪乱を生むかという問題なのである

(斎藤)。』 358-9P・・・「疎外」概念へのとらわれ。

「このように、マルクスは自然の限界をはっきりと認識していたがゆえに、より注意深く自然を取り扱う必要性を自身の社会主義構想のなかではっきりと強調したのだった。それは自然を私的所有の制度から切り離し、コモンとして民主主義的に管理することにほかならない。『資本論』は未完にとどまったが、それは資本主義のもとでの人間と自然の敵対的関係を分析するための方法論的基礎を提供するのみならず、素材的世界の立場からの抵抗を構想することを可能にしてくれるのである。それゆえに、マルクスのエコ社会主義は破局を警告するだけの「終末論」ではない。／その際の社会主義的戦略で言えば、マルクスの社会変革構想は時代とともに変化していった。『共産党宣言』においては、まだ楽観的に、大恐慌が労働者の蜂起を引き起こすと考えていた（大藪）。ところが一八四八年の革命が失敗し、一八五七・五八年の革命もそのような大きな蜂起を引き起こさなかったために、マルクスは楽観論を放棄し、資本の強靱さの源でアルム弾力性を研究するようになっていく。」 359-60P

「マルクスの方法論をもとにして、マルクスの死後に明らかになった科学的知見を積極的に取り込むことによって、マルクス主義のエコロジーはグローバル環境危機の時代にこそ一層深化させられなければならない（Angus）。その限りで、本書の冒頭のイムラーのように「マルクスを忘れろ」と結論づけるのはまだ早すぎる。資本主義によって引き起こされる物質代謝の亀裂と環境危機が深まるいまだからこそ、張一兵に倣ってこう言わなければならないだろう。「マルクスへ帰れ！」」 363P

あとがき

文庫版あとがき

「ただし、システム・チェンジが一か八かの大変革に賭けるような形になってはいけない。そのような賭けは失敗するからだ。また、多くの人々を捲き込むためには、単に資本主義を批判・否定するのみならず、よりポジティブな未来社会像を描く必要がある。だからこそ、理論が必要なのである。その理論は、包括的で、体系的なものにならなければならない。まさに、マルクスが生涯をかけて、哲学、経済学、歴史学、政治学のみならず、自然科学まで学ぼうとしたように、わたしたちは、まさにマルクスのような態度をもって、気候危機を誰も取り残すことなく解決するための道筋を探す必要がある。」 369P・・・「哲学」も入っている。

解説

スラヴォイ・ジジェク

「私たちは、資本主義においてどのように「確固としたもの、永遠のものと思われていたものはことごとく煙として消え、神聖なものはことごとく汚され [る]」のかというマルクスの文言を自然そのものに当てはめるべきではないのだろうか？ 現在最新の遺伝子工学の進歩とともに、私たちは率直に言えば自然そのものが煙へと消えていく新たな段階へと突入している——遺伝子工学の科学的ブレイクスルーによってもたらされる主要な帰結が自然の終焉となるような段階である。……………」 376P

「遺伝子工学とは、人間の精神そのものが技術的操作の客体へと還元されていくことを伴うため、ハイデガーが近代技術に備わる固有の「危険」として知覚したものが、事実上、ある種経験的に具体化されたものである。ここで重要なのは、人間と自然の相互依存であ

る——人間をその性質が操作されうる自然的客体のひとつへと還元することによって、私たちは人間（だけ）ではなくて自然そのものを喪失する。この意味においてフランシス・フクヤマは正しかった——人間それ自体は、何らかの「人間性」の概念に依拠している。……」379P

「昨今、科学は資本主義に対するいかなる抵抗運動にもこれまで以上に必要とされてきている。肝要なのは、科学には記憶力がなく、科学は心理の次元を無視するために、科学そのものだけでは抵抗するに十分ではないということである。」386P・・・ひとの主体性が、哲学も必要になっている。

(註)

わたしはアルチュセールを読んでいなくて、それでも廣松さんがアルチュセールについて、なぜ言及しないのかということを見ると、廣松さんとアルチュセールは同時並行的に独自に「疎外論から物象化論へ」というマルクスの転換を押さえたのでしょうが、アルチュセールは廣松さんのようにマルクスの理論をほり下げて独自の展開をしているとは言えないので、自分の論の表面をなぞった論としてとらえて、コメントをしなかったのではないか、などと考えていました。

(追記)

斎藤さんの文献学的研究での廣松さんの「疎外論から物象化論へ」ということでのパラダイム転換論批判を読んでいて、わたしが想起していたのは、廣松さんの編集した（小林昌人補訳）『ドイツ・イデオロギー』の岩波文庫版へ、『草稿完全復刻版 ドイツ・イデオロギー』新日本出版社 1998 の編・訳者の渋谷正さんが、廣松さんが読み落としている資料があって編集しているので、編集を間違えているという批判を思い出していました。そもそも廣松さんは、訓詁の学としての文献学としてマルクス——エンゲルス論をやっているわけではなく、マルクス理論の深化として独自の展開をしているのであって、そこも含めて押さえないと、アルチュセールと一緒にたにして、「疎外論から物象化論へ」の批判をすることになるのだと思います。廣松理論は、廣松〇〇論といういくつもの独自展開をしています。斎藤さんはまだ 30 代のひと、廣松を読み込んでいて、自らの論展開に活かしてもらえればと、いつもの「ないものねだり」的願望をいただいていた。

インターネットへの投稿から

2023.8.22 汚染水放出策動の中で

昔、菅元首相が官房長官時代に、年末に「もちを食ったら、忘れる」発言をしました。また、森元首相は、「投票にいかないことは自民党にとっていいことだ」という発言をして、他の政治不信とともに選挙に敗北し、首相の座を追われました。安倍元首相は 118 回の虚偽答弁をし、文書の付度改竄事件の元凶にもなっています。官僚の自死者さえ出ています。そして、企業は嘘つき政治に右に倣いし、データの改竄事件など起こしては、謝罪会見を繰り返しています。嘘をつき、形だけの謝罪をすることが、政治家・企業家トップの才覚だと思っているとしか言いようがないのです。

地元の漁業の承認なしには、「汚染水海洋放出はしない」という確認書を交わしていたの

に、福島漁連が「最後の一滴まで反対し続ける」といっているのに、海洋放出をしようとしています。「聞く耳をもつ」政治とか、科学的にとか、モニタリングを続けるとか、「責任をもって」とか言っていますが、みんなウソとしか思いようがありません。そもそも約束を破って、そしてうそにうそを重ね、嘘つき政治の元凶の安倍元首相を国葬にまでしておいて、誰が信用するのでしょうか？ もうこんな政治お終いにしましょうー

2023.8.31 政府・マスコミ一体になった汚染水放出での中国バッシング

政府の支持率が下がったときに上げる方法——他国との対立をあおること。麻生太郎自民党副総裁が「学べ」というナチスの手法。下記のゲーリングの言葉に端的に表れています。

マスコミもまんまと「右に倣い」をしてお先棒をかついでいます。原発事故を起こし、汚染水をながそうとしているのは中国でなく、日本です。

(ニュルンベルク裁判の裁判所付きアメリカ人心理学者ギュスターヴ・M・ギルバートとゲーリングとの対話)「ひとつだけ違いがありますね」わたしは反論した。「民主主義では国民は、自分たちが選んだ代議士に代弁させることができます。アメリカ合衆国では宣戦布告ができるのは議会だけです」 / (ゲーリング)「ほう、それは誠にすばらしい。しかし国民に参政権があろうとなかろうと、指導者の命令に従うように仕向けることはいつでも可能だ。それは至極簡単なことだ。攻撃されたら国民に伝え、平和主義者のことを愛国心に欠けると非難し、平和主義者が国を危うくしていると主張すれば事はすむ。この方法はどんな国でも有効だ」(たわしの読書メモ・ブログ 617 / ・クラウド・コルドン / 酒寄進一訳『ベルリン 1945 はじめての春 上・下』岩波書店(岩波少年文庫)2020)

事故を起こしていない原発の冷却水は「トリチウム水」と表現できるでしょうか？ これさえ、遺伝子変異をもたらすと指摘しているひとがいるのに、デブリに触れたのはまぎれもなく汚染水、しかも、アルプスを通しても核種が取り切れていないから「汚染水」というのに、それを流すのは論外です。うそがあるところに科学などありえませんが、「科学的」というなら、全ての原発を止めて、一から議論をしないおすべしこと。

2023.8.31 岸田首相の「科学的」という大嘘

岸田首相の汚染水放出のキーワードは「科学的」ということです。「科学的」ということは、自然科学だけでなく、社会科学や人文科学も含まれますが、最低限「論理整合的」であることが求められます。ところが、地元の了解なしに「海上放出はしない」と約束をし、福島漁協の会長さんが「最後の一滴まで反対する」と言っているのに、海上放出しています。ウソの上に立った「科学的」ということはあり得るのでしょうか？ 「責任をもって」とか言っていますが、ウソに責任を持つということでしょうか？ ウソにウソを重ねていく政治はもうおしまいにしましょう！

2023.9.1 汚染水放出問題 岸田首相の「科学的」は大嘘、これが「科学的」という話
木野龍逸×神保哲生：なぜ東電は問題だらけの汚染水の海洋放出に追い込まれたのか

<https://www.youtube.com/watch?v=-l5JAPZqMI4>

ロバート・リッチモンド×神保哲生：汚染水の海洋放出は世界の流れに逆行する

https://www.youtube.com/watch?v=f6j8a_ugsME

「汚染水はなぜ流してはならないか」小出裕章講演会

<https://www.youtube.com/watch?v=nxpVO0bL5X8&t=75s>

時間のないひとは、ロバート・リッチモンドさんの話が一番短くて、判り易いです。
マスコミが政府の「科学的」という大嘘を拡散させています。こちらの「科学」をインターネットで拡散しましょう！

2023.9.1 汚染水放出問題 岸田首相の「科学的」は大嘘、これが「科学的」という話(2)

かなり長い(2時間 40分)ですが、これを見ると東電、政府がいかにごまかしと、ウソを積み重ねてきたかが分かります。解決方法の提起もしています。

原子力市民委員会 公開フォーラム 「いま改めて、処理汚染水の海洋放出問題を考える」

<https://www.youtube.com/watch?v=E68L0tK6RPI>

23.9.3 汚染水海上放出といううそとごまかしと不信

下記の転載したビデオを観て、わたしも自分なりにまとめて見ました。

2023.8.26 福島第一原発 ALPS 水・海洋排水に関する 12 の誤りを指摘する(烏賀陽弘道)

<https://www.youtube.com/watch?v=Q4199GGE20U&t=8s>

(自己ノート)汚染水の海上放出といううそとごまかしと不信

・原発事故を起こし、きちんと検証も補償もちゃんとおこなわず、再稼働までつづけていて、海洋放出までしようとしていること……全ての原発の廃炉を決定し、反対してきたひとも含め英知を結集して、事故の処理や廃棄物の処理をどうするのか総力的議論で解決していくこと

・「処理水」といううそ……トリチウムはとれないし、いろんな核種もとりにきれいでない

・「トリチウムは危険でない」というウソ……遺伝子変異を起こすという意見があります。

玄海原発や泊原発のあたりでの白血病やがんが増えているという話も出ています。

・「残っている核種は基準以下で安全」というウソ……生物濃縮の問題をとらえていません。放射線被害はきちんと実証されていません。70年以上経って「黒い雨」訴訟の保障・補償の問題が出ているなどの実例もあります。被害が起きてから保障すればいいという論理は、科学的安全の論理としてある「予防原則」に反します。

・「汚染水のタンクの空き地が一杯」というウソ……原発の周りにひとの住んでいない空き地が広がっています。土地の持ち主の補償と確認をきちんととっていくこと。

・「汚染水の処理方法は他にない」というウソ……タンクの増設以外も、いろんな方法が提起されています(モルタル固化、水蒸気蒸発、石棺とそれを地下水の流入阻止にまで広げること)、いろんな方法を経済性のはなしで、切り捨てています。そもそも、津波の危険性を指摘するひとがいるのに、金の話で握りつぶしたことを反省していません。今後の補償

も含めたら、海上放出は膨大な補償金額になるし、ひとのいのちと生活の問題を金がないと、危険に落としこめるとするのは、最悪の政治です。

・「他の国もしているという論理」のうそとごまかし・・・スリーマイルもチェルノブイリでも汚染水の放出はしていません。デブリに触れた水の放出と通常運転でのトリチウム放出は次元が違います。そもそも、他の国がやっているから自分たちもやるという論理は、駄々っ子の小学生の論理。

・海上放出施行団体がモニタリングするという不信・・・うそとごまかしを続けてきた、事故を起こした当事者会社にモニタリングを任せるという信じられない事態になっています。

・「科学的」ということで、マスコミ操作・世論操作をしている不信・・・盗人猛々しい中国バッシングして、そもそも日本で反対しているひとたちの意見も封じようとしています。「科学的」ということばを、「水戸黄門の印籠」(註)のように「権威主義国家」の手法を使っています。・・・科学は全知全能の神ではなく、むしろ、分からないことの方が多いいというところで、予防原則に則って、いかに、後代のひとたちを危険にさらさないかを考えていくのが科学。岸田政権の「科学」は真逆のこと、ウソにウソを重ねていくことをしています。

・「科学的」と言うこと自体がうそ・・・以上の論攷で、ウソの上に立つ科学などありえず、「科学的」ということ自体がうそであることが分かります。

(註)

安倍元首相が森友問題で追及されていたときに、「水戸黄門の印籠じゃあるまいし、官僚は付度などしませんよ」という答弁をしていました。実際は付度が起きて文書の改竄をさせられたひとが自死しました。「水戸黄門」は封建時代のひとで、今政府が使っている「権威主義国家」の類いですが、民主主義を自称する国の政府が、そんな政治をするなど信じられません。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 137 号」アップ(23/9/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページに不備・加筆することがあり、昨年かなり大幅な更新をしました。「今後の課題」など関心をもってもらえる方は、読んでもらえると幸いです。<http://www.taica.info/kaikadai2.pdf>
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」で見れなかったところをチェックして一部修正して再アップしました。今のところ、全部見れるようになっています。「吃音者」当事者団体に活動していた時代の、「個的伝言板」として出していた「ふれあい」のバックナンバーの「金閣寺」関係の文書、後日アップする読書メモの本の関係でまとめて、「反差別資料室 A」にアップしました。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」も、新しい本の購入や読書に合わせて、3月の末に二年ぶりにリアップしました。

(編集後記)

◆9月から元の発刊態勢に戻しました。早速、原稿が溜まり始めまして、月二でも、やれる感じなのですが、そうすると編集作業に追われてしまいます。暫く、月一で続けます。

◆巻頭言は、岸田政権の汚染水放出の「科学的」という非科学的な話、科学の世界での安全かどうか、という話のそれ以前の、科学信仰批判として書きました。「インターネットへの投稿から」と併せて、汚染水問題特集になっています。

◆読書メモは、斎藤幸平さんの本の3冊目、彼の論の輪郭をだいたいつかめたのではないかと、とかなり共鳴的に思っています。

◆「インターネットへの投稿」は汚染水問題での、You-Tube ビデオでの学習的なことを含めたコメント。You-Tube のビデオのURLを貼りつけているのですが、字幕がついていないし、文字起こしをすることや、映像鑑賞メモでひとつひとつメモを残していくことなのですが、とりあえず、貼りつけました。

◆最近、汚染水問題で、大政翼賛的なところで、政府の支持率を上げるために、別の言い方をすれば、国民統合のために、「科学的」ということを水戸黄門の印籠のようにして、中国批判に入っています。敵を作ってバッシングするということで、支持率を上げるという常套的手法なのです。これまで政府批判の役割をそれなりに担ってきたマスコミがまんまと、それに乗ってしまっています。わたしはニュースの梯をしてきたのですが、余りにもひどいニュース、報道で、最近、インターネットの寄付による制作番組に移行しています。ただ、字幕がついていないのです(一部ついていても、音声変換ソフトを使っていて、それをそのまま流していても内容がつかめません。)。テレビの生ニュースは、折角ついていても、かなりのタイムラグがあって見にくいとはいえ、やっとニュースにも字幕がついてくるようになっていたと思っていたのに、そのニュースの内容自体があまりにもひどすぎます。そもそも手話通訳がほとんどついていないのですが、ろう者からSNSで、首相会見に手話通訳がついていたけど、単語の羅列で意味がつかめないという主旨の批判も出ていました。何か全然進んでいきません。というより、根本的なことを変えないとどうしようもないのです。

◆前項に関連して、手話の世界で、秋篠宮の佳子さんが、高校生のスピーチコンテストで冒頭部分を除いて、声なしでスピーチをしたという話を、画期的だと評価するコメントがSNSで出ていたのですが、よく判らない話です。そもそも、これから、スピーチ・コンテスト以外で手話で話すとき、声なしにしていくのでしょうか？　そもそも、このスピーチ・コンテスト、声をつけて話さないと失格になるという批判があったのです。その評価基準を変えて、声を出しながら手話をすると失格すると変更したのでしょうか？　そこまで行かなくても基準を変えたのでしょうか？　イギリスの王室のダイアナ皇太子妃も手話を使っていました。王室や皇室の手話は、国家の福祉の象徴、しかも恩恵としての福祉の象徴なのではないのでしょうか？　何でも利用できることは利用しようという実践的精神なのかもしれませんが、両刃の剣というようなことを感じています。今、法制度をすすめている団体の発行している文書をみると、自公政権に頼ることによって法制度的な前進が勝ち取られたというようなことが書かれているのを目にしますが、自公政権の福祉政策自体が、恩恵としての福祉(かわいそうひとたちを国家がたすけてあげるという

差別的な福祉) そのものの歴史で、戦争のできる国づくりの中で、福祉がどうなっていくのかとか、差別の象徴としての天皇制の役割とか、過去の天皇制ファシズムの歴史をどう押さえているのでしょうか？

◆わたしは、最近、市民運動、そして「新左翼」も含めた「左翼運動」のセクト主義的な自己中心的な排外主義的運動の危うさを感じています。自分たちの運動を進めるために、仲間となり得るひとたちのことを批判する、切れ捨てるという傾向が出ています。これに関してはC型肝炎訴訟の、「誰も切り捨てない」という運動の実践事例があるように、きちんとした分析、何が問題になっているのかを押さえる中での、幅広い運動の結集を図っていく運動が必要になっているのだと思えます。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながらか、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながらか議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>